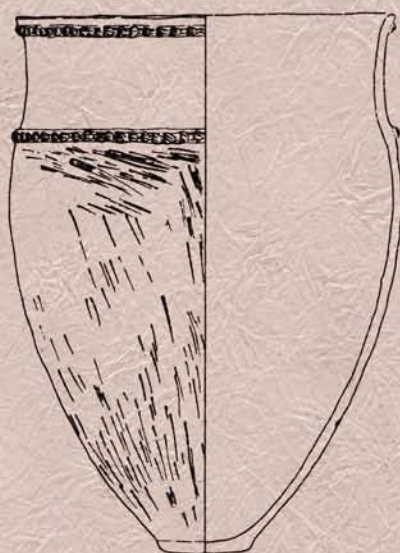


近畿自動車道(久居～勢和)

埋蔵文化財発掘調査報告

第 3 分 冊 7

天 保 遺 跡 E 地 区



1991・3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は平成2年度に三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書のうち、天保遺跡E地区の調査報告書（第3分冊7）である。
2. 調査（整理・報告書作成業務）にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。
3. 調査（整理・報告書作成業務）の体制は下記のとおりである。
 - ・調査主体 三重県教育委員会
 - ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第2課第1係
 - 次長兼調査第2課長 山澤義貴
 - 主査 新田 洋 ・ 主事 河北秀実
 - 主事 増田安生 ・ 主事 齋藤直樹
 - 技師 大川勝宏 ・ 主事 伊藤裕偉
 - 主事 角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）
 - 主事 稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）
 - 主事 前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）
 - 管理指導課 主事 小坂宜広 ・ 主事 江尻 健
 - 川崎正幸（臨時調査員）・反町瑩子
 - 采野妙子・谷久保美知代・吉村道子
 - 山分孝子・白石みよ子・乾ひとみ
 - 竹内由美・上村かおり・中山学・反町有子（室内整理員）
 - 森田幸伸（皇學館大学学生）
 - 近藤大典（皇學館大学学生）
4. 本書作成にかかる各整理は上記体制で行い、報文の執筆分担については目次及び各文末にも明記した。
なお、遺物整理、報文執筆にあたっては、下記の方々からご指導、助言を賜った。また石器実測の一部に鈴鹿市教育委員会新田 剛氏の協力を得、図版トレースの一部に北山美奈子氏の助力を得た。記して謝意を表する。
（順不同、敬称略）
 - 家 根 祥 多 （立命館大学助教授）
 - 奥 義 次 （三重県立松阪高等学校教諭）
5. 天保遺跡E地区については、既に刊行の『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県教育委員会・1988.3）にその調査概要を公表しているが、本書をもって最終的な報告とする。
6. 天保遺跡E地区の記録類、出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書に使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。また、遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。

S B 堅穴住居、掘立柱建物 S D 溝 S X 墓、その他性格不明遺構 S K 土坑
S F 焼土 Pit ビット

8. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

例	言
目	次
挿 図	目 次
表	目 次
図 版	目 次

前 言	(田村 陽一)	1
天保遺跡E地区	(田村 陽一)	7

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図(1)	2	第10図	SB2・6・7・8実測図	15
第2図	遺跡位置図(2)	3		SK4遺物出土状況実測図		
第3図	遺跡地形図	7	第11図	SB11・13、SK12実測図	16
第4図	調査区位置図	8	第12図	遺物実測図	18
第5図	発掘区位置図	8	第13図	遺物実測図	19
第6図	遺構配置図	9	第14図	遺物実測図	20
第7図	SX1実測図	10	第15図	遺物実測図	21
第8図	遺構平面図	11~12	第16図	遺物実測図	22
第9図	SB3~5・9、SK10 実測図	14	第17図	遺物実測図	23

表 目 次

第1表	発掘調査遺跡一覧	4~5	第4表	遺物観察表	27
第2表	E地区検出竪穴住居一覧	13	第5表	遺物観察表	28
第3表	遺物観察表	26	第6表	遺物観察表	29

図 版 目 次

PL1	E地区全景		PL11	SB11・13、SK12	
PL2	E地区調査後全景		PL12	出土遺物	
PL3	E地区、天保古墳群調査後全景		PL13	出土遺物	
PL4	SX1		PL14	出土遺物	
PL5	SB3~7・9		PL15	出土遺物	
PL6	SB2~5		PL16	出土遺物	
PL7	SB4貯蔵穴、作業風景		PL17	出土遺物	
PL8	SB5・6		PL18	出土遺物	
PL9	SB7・8		PL19	出土遺物	
PL10	SB9、SK10				

前 言

1. 調査の経過

本書に掲載した天保遺跡E地区の発掘調査は、昭和62年度に実施された。

近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）にかかると埋蔵文化財発掘調査は、昭和59年度に現地調査を開始し、昭和61年度内には多気郡多気町地内の全ての遺跡と松阪市地内のほとんどの遺跡の発掘調査を終了し、久居市、一志郡嬉野町地内の第1次調査に入った。

昭和62年度からは調査地の重点を久居市、一志郡一志町・嬉野町地内に移し、戸木遺跡、鳥居本遺跡、焼野遺跡、天保遺跡A・B地区、C地区、D地区、

E地区、天保古墳群、堀之内遺跡などの発掘調査を実施した。昭和63年度は前年度から継続している遺跡の調査を中心に行い、第8次区間内にある遺跡の現地調査を終了した。

調査にあたっては日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、並びに、地元の各関係機関、地元自治会など各位より惜しみない援助を受けた。また、現地発掘調査にあたっては三重県土地開発公社よりひとかたならぬ力添えがあった。ともに記して心より感謝申し上げる。

2. 調査および整理の方法

現地調査の方法については第1分冊を参照された。また、資料整理も第1分冊に示した方法により実施したのでここでは略する。天保遺跡E地区の遺

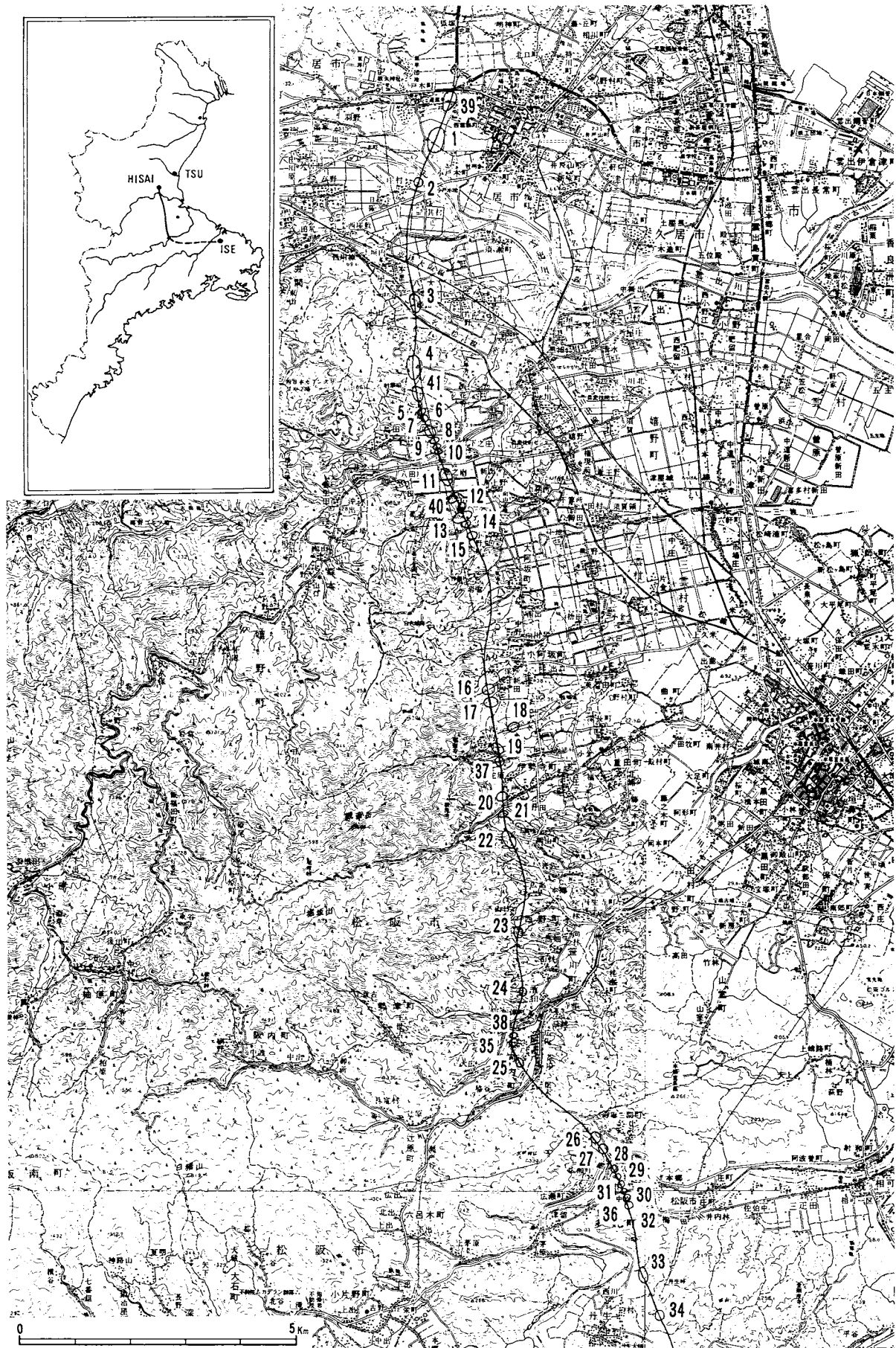
構実測図の整理番号は7-2001～7-2039、抽出遺物の整理番号は7-2001～7-2156である。

3. 調査の体制

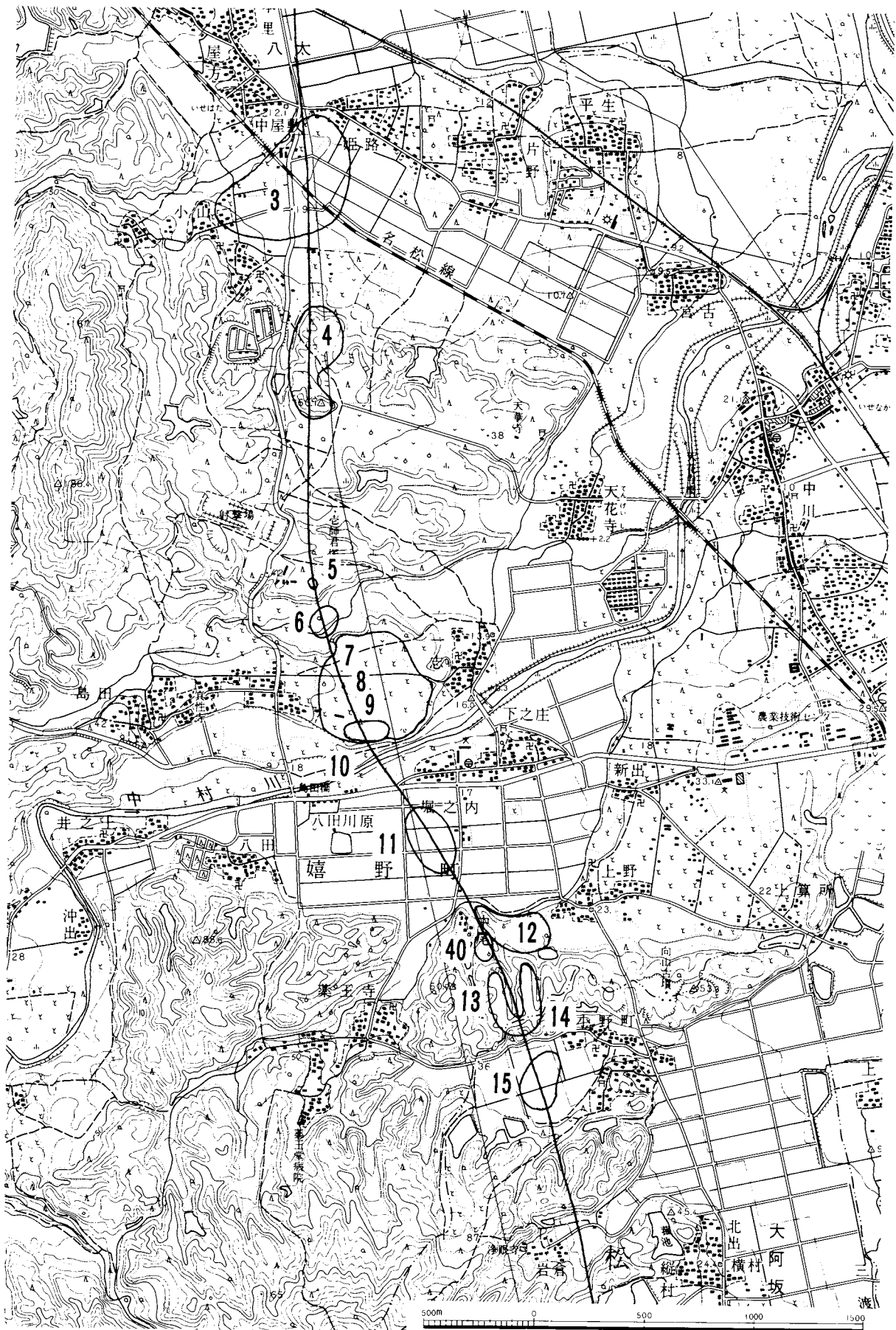
昭和62年度

文化財第二係長	伊藤久嗣	総括
技 師	新田 洋	調整・協議、焼野遺跡ほか
主 事	山下雅春	戸木遺跡ほか
〃	田中喜久雄	戸木遺跡
〃	河北秀実	堀之内遺跡ほか
〃	増田安生	天保遺跡ほか
〃	田村陽一	天保遺跡ほか
〃	宮田勝功	鳥居本遺跡ほか
〃	野田修久	天保古墳群ほか
臨時調査員	木許 守	
室内整理員	谷久保美知代	近藤豊美
〃	山本紀子	大西友子

室内整理員	野崎栄子	中谷とも代
〃	東千恵子	山際みち子
〃	孝久由希子	
調査指導	（昭和62年度、順不同、敬称略）	
木下 正史	（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室長）	
八賀 晋	（三重大学教授）	
堅田 直	（帝塚山大学教授）	
安孫子昭二	（東京都文化課学芸員）	
磯部 克	（三重県立津西高等学校教諭）	
発掘調査土木工事部門担当	三重県土地開発公社	
堀内 信吾	稲葉 庄衛	
浜口 安光	仲田 辰実	
		（田村 陽一）



第1図 遺跡位置図(1) (1:100,000)



第2図 遺跡位置図(2) (1:25,000)

番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)		調査期間 (元号は昭和)	担当者	概要	
				計				
1	小戸木遺跡	久居市小戸木町	192	432	62. 3. 3~ 3. 5	宮田 勝功	遺構・遺物なし(試掘)	
			240		62. 9.20~ 9.24	木許 守	" (")	
2	庄村遺跡	一志町庄村		304	62. 9.14~ 9.20	新田 洋	遺構なし・遺物微量(試掘)	
3	鳥居本(八反田)遺跡	一志町小山、新沢田	8,900	11,540	62. 9.24~63. 3. 7	宮田 勝功	弥生中期方形周溝墓など検出	
			2,640		63. 5.16~ 7.27	小坂 宜広 河北 秀実	飛鳥時代の井戸検出	
4	西野(天花寺)古墳群	嬉野町天花寺		3,400	62.11. 9~11.31	新田 洋	(山林伐開)	
					63. 5.16~ 9.28	新田 洋 山崎 恒哉	石剣・車輪石片出土、前期の古墳1基	
5	焼野(口山田)古墳	嬉野町島田		2,010	62.7.11~ 9.30	山下 雅春	古墳は畑寄せによる盛土と判明、石核出土(試掘)	
6	焼野(口山田)遺跡	嬉野町島田		3,500	62. 5.11~ 8.24	宮田 勝功 新田 洋	奈良時代の住居跡など検出	
7	天保(天保B)遺跡A・B区	嬉野町島田		7,200	62. 5. 7~ 9. 4	田村 陽一	平安時代の竪穴住居など検出	
8	天保(一志西部)遺跡 C区	嬉野町島田		5,000	62. 5.18~ 6.30	増田 安生	奈良~平安時代の竪穴住居など検出	
9	天保(天保館跡)遺跡 D区	嬉野町島田		3,800	62. 7. 1~ 8.12	増田 安生	"	
10	天保古墳群 (天保遺跡E区)	嬉野町島田		5,390	62. 8. 5~63. 7.12	田村 陽一 野田 修久	6世紀中ごろの横穴式石室墳など	
11	堀之内遺跡	A区 A区 B区 C区 D区 C区下層	嬉野町堀之内	1,450	14,250	62. 2.23~ 3.13	新田 洋	(側道部分の調査)
				2,200		62. 5. 6~ 7.16	河北 秀実	古墳~平安時代の住居跡など検出
				2,200		62. 7.23~10. 1	河北 秀実	古墳~平安時代の溝など検出
				5,400		62. 9. 1~63. 3.19	増田 安生	弥生後期竪穴、平安の掘立柱建物など検出
				700		62.10.25~11.20	木許 守	古式土師器出土、ヤナ状遺構検出
				1,900		63. 5.18~ 8.13	田村 陽一	縄文中・後・晩期の土器多数出土
400	62. 5.20, 6.29~ 7.22	河北 秀実	(調査区南端、北端部の試掘)					
12	中尾遺跡	嬉野町薬王寺	93	600	62. 3. 4	河北 秀実	(試掘)	
			507		62. 5. 6~ 6. 5	河北 秀実	掘立柱建物3棟検出	
13	東映遺跡 (ビハノ谷古墳群)	嬉野町薬王寺・下之庄	1,000	13,000	62. 3. 2~ 3.30	野原 宏司	(山林伐開、表土掘削)	
			12,000		62. 5.19~ 8.12	野田 修久 木許 守	弥生土器出土	
14	女牛谷古墳群	松阪市小野町 嬉野町薬王寺・下之庄	4,031	7,171	61.12.15~62. 2.21	野原 宏司	(山林伐開、第1次調査)	
			3,140		62. 5. 7~ 7.11	木許 守 野田 修久 山下 雅春	後期の古墳群	
15	平田遺跡	松阪市小野町		228	61. 2.18~ 2.24	田村 陽一	遺構なし、遺物微量(試掘)	
16	山見(下山見)遺跡	松阪市小阿坂町		224	60.11.12~11.20	野原 宏司	遺構なし、遺物微量(試掘)	
17	新田遺跡	松阪市小阿坂町	288	4,688	60.11.15~11.25	野原 宏司	(試掘)	
			4,400		60.12.27~61. 3.25	野原 宏司	縄文後期土器出土	
18	垣内田古墳群 (垣内田遺跡)	松阪市岩内町	428	6,528	60.11.26~12.12	野原 宏司	(試掘)	
			5,500		60.12.27~61. 3.25	吉水 康夫	横穴式石室墳を主体とする古墳群	
			600		61. 6.30~ 7.30	野田 修久		
19	藪ノ下(岡崎古墳群)遺跡	松阪市岩内町	1,100	2,500	61. 3. 1~ 3.25	田村 陽一	(試掘)	
			1,400		61. 6.30~10. 3	田村 陽一	良好な資料となる縄文後期土器多数出土	
20	覆長遺跡	松阪市伊勢寺町	304	2,708	60.10.18~10.24	田村 陽一	(試掘)	
			2,404		60.11.26~61. 3.18	河北 秀実	奈良~平安時代の竪穴住居検出	

第1表 発掘調査遺跡一覧(太ゴシックは本書所収遺跡)

番号	遺 跡 名	所 在 地	調査面積(m ²)		調 査 期 間 (元号は昭和)	担 当 者	概 要
21	平林古墳群	松阪市伊勢寺町		計 4,021	61. 6. 9～10. 3	新田 洋 河北 秀実	石室を主体とする古墳群
22	横尾(西野)墳墓群	松阪市伊勢寺町、岡山町	5,500 2,500	8,000	60. 7. 1～61. 2. 27 61. 5. 31～12. 5	田坂 仁 宮田 勝功 田中喜久雄 宮田 勝功	500基におよぶ中世墓群 後期小型円墳(横穴式石室)2基 後期小型方墳(木棺)2基
23	さんざい林遺跡	松阪市西野町		176	60.10.25～10.26	田村 陽一	(試掘)
24	坂東(大河内5号)古墳	松阪市笹川町		180	61. 7. 23～ 8. 19	野田 修久	中世土器片微量。古墳にあらず(試掘)
25	大河内城堀切	松阪市大河内町		600	62. 1. 5～ 2. 25	宮田 勝功	中世北畠氏の平山城大河内城の堀切
26	上ノ広(森下池西方)遺跡	松阪市広瀬町	224 1,136	1,360	60. 3. 22～60. 3. 31 60. 7. 1～60.10.14	上村 安生 田坂 仁 宮田 勝功 田村 陽一 野原 宏司	(試掘) 先土器末～縄文時代の石器多数出土
27	大原堀(大原堀南方)遺跡	松阪市広瀬町		114	60.10.28～60.10.31	田村 陽一	遺構、遺物微量(試掘)
28	花ノ木(山崎)遺跡	多気町牧	52 5,800	5,852	59.12.10 60. 1. 28～60. 3. 26	田村 陽一 杉谷 政樹 田村 陽一 杉谷 政樹	(試掘) 弥生時代中期竪穴住居、方形周溝墓など検出
29	浅間山北遺跡	多気町牧	44 1,000	1,044	59.12.10 60. 1. 28～60. 2. 23	高見 宣雄 田村 陽一 田坂 仁	(試掘) 土師器細片、天目茶碗片出土
30	浅間山南遺跡	多気町牧		470	60. 3. 25～60. 3. 31	河瀬 信幸 田村 陽一	遺構なし。遺物微量(弥生前期土器)(試掘)
31	牧瓦窯群 1・2・3号窯 4・5・6・8号窯 7号窯	多気町牧 多気町牧・楯形 多気町楯形	960 1,160 200		60. 7. 1～60.10.31 60.11.30～61. 3. 25 61. 6. 9～61. 8. 15	田中喜久雄 河北 秀実 田中喜久雄 野原 宏司	奈良時代の瓦専用窯 1号……平窯 2～8号…登窯
32	釈尊寺(中牧)遺跡	多気町楯形	144 1,000	1,144	60.11. 1～60.11.12 60.12. 5～61. 2. 28	田村 陽一 田村 陽一	(試掘) 掘立柱建物検出、中世土器出土
33	下村A遺跡	勢和村丹生	88 7,500	7,588	59.12. 6～12. 8 60. 1. 28～ 3. 28	増田 安生 杉谷 政樹 吉水 康夫 河瀬 信幸 上村 安生	(試掘) 石鏃・石匙・山茶碗・瓦器片等出土
34	下村B遺跡	勢和村丹生		44	59.12. 8～12. 9	増田 安生 杉谷 政樹	遺構・遺物なし(試掘)
35	岩谷遺跡	松阪市矢津町	740 4,700	5,440	61. 2. 27～ 3. 25 61. 8. 20～62. 3. 18	田坂 仁 野原 宏司 野田 修久	(試掘) 五輪塔など出土。寺(養徳寺)跡の伝承に裏づけ。
36	楯形(牧)中世墓群	多気町楯形		520	61. 7. 1～ 9. 6	野原 宏司	石組の中世墓13基検出
37	天神山古墳群	松阪市伊勢寺町、岩内町		1,750	61. 9. 20～11. 4	新田 洋	横穴式石室墳主体の古墳群
38	楯垣外遺跡	松阪市矢津町		1,676	61. 9. 1～10.18	野原 宏司 野田 修久	鎌倉時代の掘立柱建物など検出
39	久保屋敷(戸木)遺跡	久居市戸木町	12,000		62. 9. 1～63. 3. 31	山下 雅春 田中喜久雄	中世後半掘立柱建物、井戸、土塁状遺構など検出
40	ビハノ谷遺跡	嬉野町薬王寺		1,600	63. 4. 11～ 5. 11	小坂 宜広	古墳時代竪穴住居。鎌倉時代掘立柱建物検出
41	西野遺跡 北広遺跡	嬉野町天花寺 嬉野町天花寺		2,473	63. 7. 12～ 8. 3	野田 修久	古式土師器片出土(試掘) サヌカイト製尖頭器片出土(試掘)

※調査総面積は151, 715m²、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。



一志郡嬉野町島田 ^{てんぼ}天保遺跡E地区 (10)

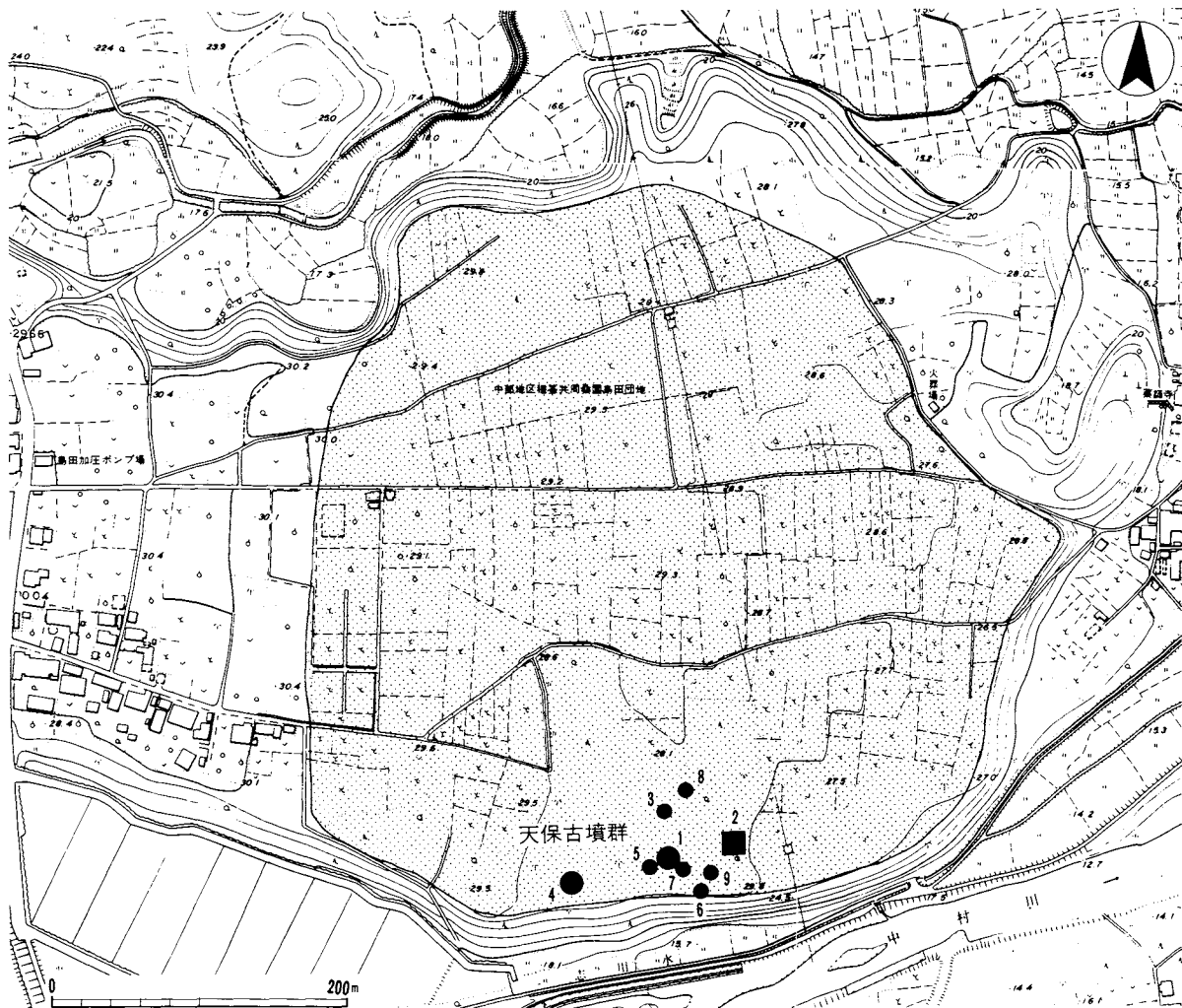
1. はじめに

天保遺跡は一志郡嬉野町島田から一志にかけての、中村川左岸にひろがる標高30m前後の河岸段丘上に立地している。県道丹生寺一志線から東の段丘面上の畑地には、濃淡はあるにせよ、ほぼ全面に土器片等が散布している。

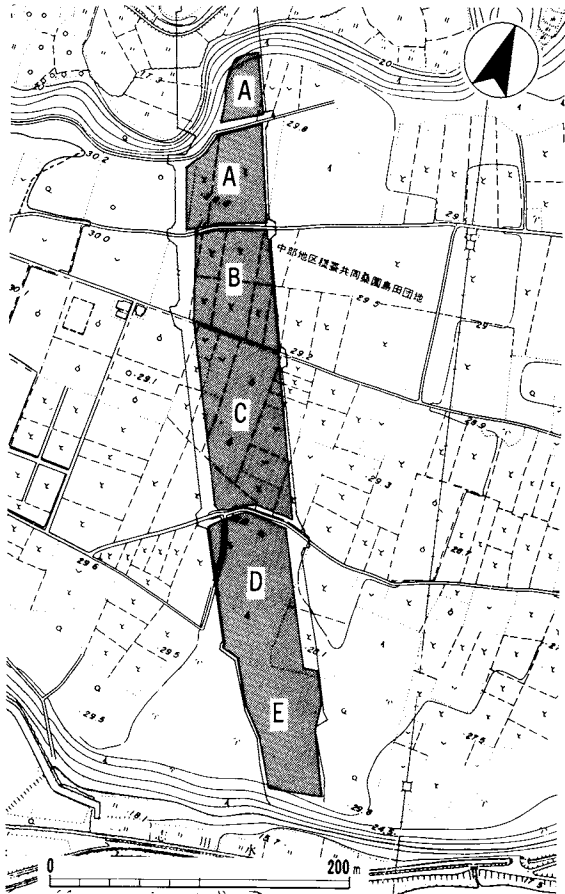
当初、近畿自動車道建設予定地内においては、三重県遺跡台帳に基づいて、天保B遺跡、一志西部遺跡、天保館跡というように個別の遺跡名で呼称していたが、これらの遺跡は連続して段丘面の全体にひ

ろがっており、明確な区分が困難なことなどから、遺跡の中心的な小字名をとり、「天保遺跡」と呼ぶことにし、一括して取り扱うことにした。

当遺跡は島田の集落東方に位置し、南北約450m、東西約500mにひろがる。標高は約29mで、北の段丘崖から北を望むと、眼下に焼野遺跡が、また、北西には縄文時代晩期の竪穴住居と合口土器棺墓が検出された蛇亀橋遺跡^①が一望できる。また、段丘崖南端に立てば、中村川を隔てて沖積平野がひろがり、



第3図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第4図 調査区位置図 (1:5,000)

堀之内遺跡を見ることができるほか、向山古墳・鍔山古墳といった古墳時代前期の前方後方墳も望むことができる。なお、この段丘崖南端付近には天保古墳群がある。9基の古墳から成る天保古墳群のうち、6基は近畿自動車道建設予定地内にあり、天保遺跡の調査と並行して発掘調査が実施されている。

天保遺跡の調査区は南北約450mにわたる長大なもので、道路などで分断されるため、便宜上、北から次のように分けて呼称することにした。

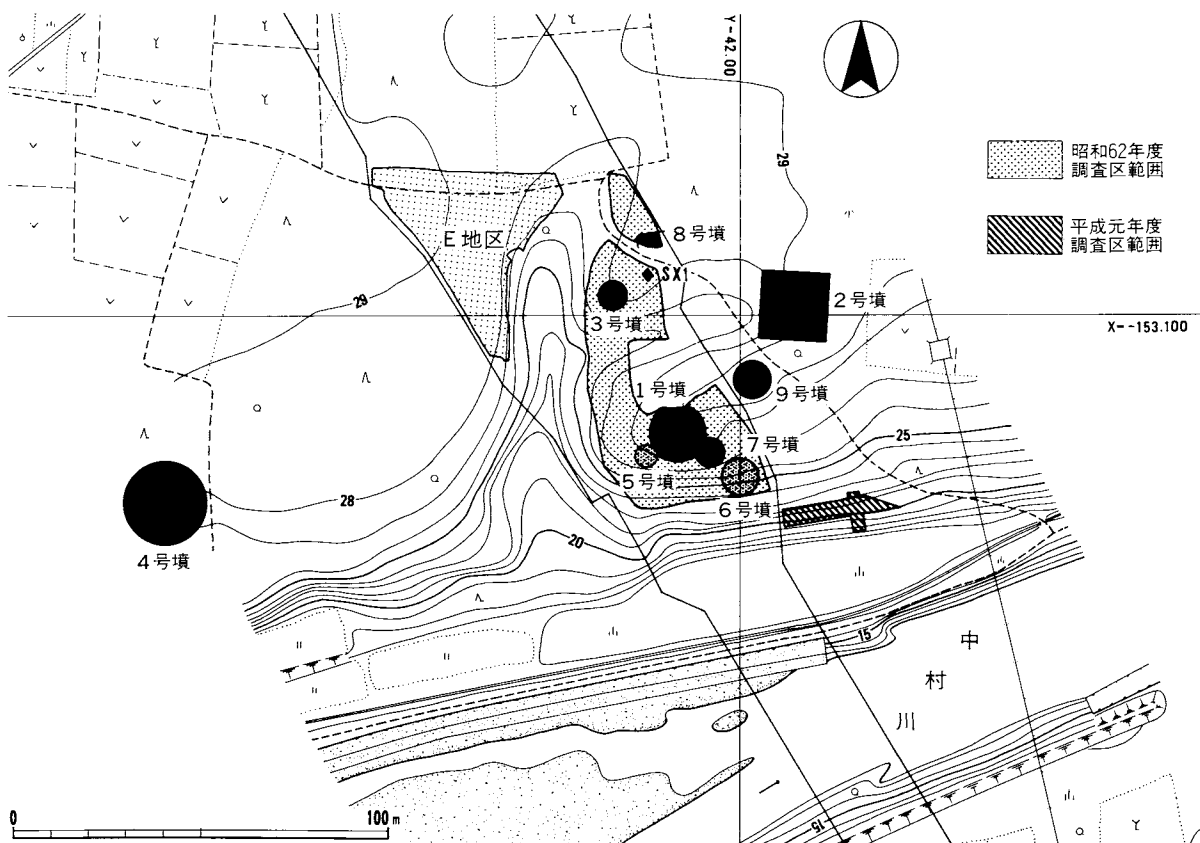
A・B地区 (旧称の天保B遺跡)

C地区 (旧称の一志西部遺跡)

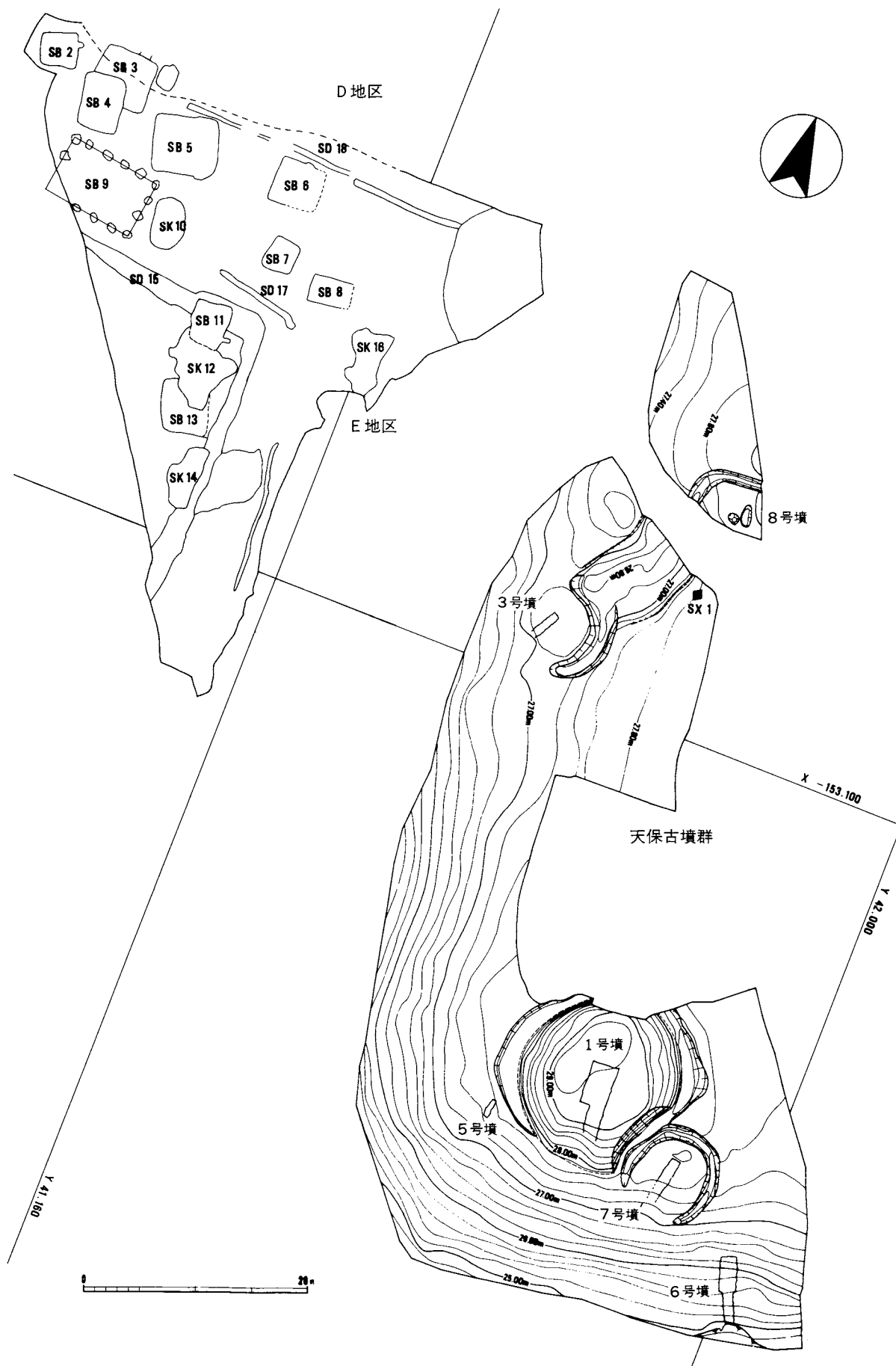
D地区 (旧称の天保館跡)

E地区 (旧称の天保古墳群のうち古墳群以外の地区)

E地区はD地区に南接する。調査区の中央部を南流する小谷により東西の二地区に分けられるが、当初は天保古墳群として調査を実施した。東地区では縄文時代晩期後半の合口土器棺墓が検出された以外には古墳を除いてめぼしい遺構はなかった。しかし西地区では飛鳥時代以降の遺構がD地区から連続して検出されたためE地区と呼称し、天保古墳群とは



第5図 発掘区位置図 (1:2,000)



第6図 遺構配置図 (1 : 500)

整理や報告書作成を分離して進め、報告書も別冊で刊行することにした。本書では西地区の遺構と遺物、東地区の土器棺と縄文・弥生土器と石器のみを取り扱い、天保古墳群は別冊で報告する。

D地区とE地区の調査区を分けていた小径を最後に取り除いたため、最終的にはD地区とE地区とは連続することとなった。

2. 遺 構

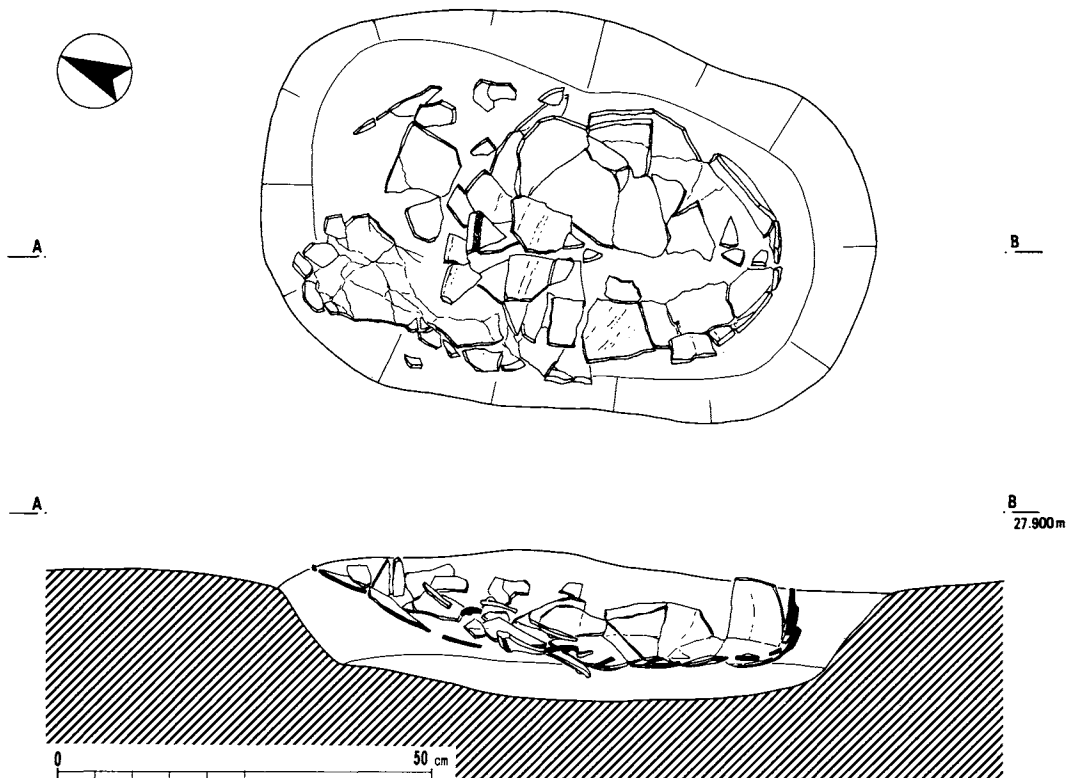
E地区における土層の基本的な層序は第I層：褐色土（表土）、第II層：黒色土（いわゆる黒ボク）、第III層：黄褐色土（地山）、第IV層：段丘礫層からなる。遺物は第II層の黒色土に包含される。遺構検出は第III層上面でおこなった。遺構の埋土は中世のものが褐色土、その他が黒色土であった。

ところで、この小谷の西側では伐開後新に中世城館を思わせるようなL字状に曲がる高さ0.5m～0.8mの土塁状の盛り土と、その内側に平行して延びる深さ0.5mほどの堀状の溝が確認された。これらは調査区外へと延び、「コ」の字状となっている。今回の調査区はそのうちの北東隅にあたり、ごく狭い範囲ではあったが中世城館に関連するような遺構、遺物は検出されなかった。この土塁状の盛り土中や溝の埋土中からは各時期の遺物が多く出土したが、

土層観察等の結果、近世以降の開墾等に伴うものと判断した。また、中央部の小谷の東側では人頭大から拳大の河原石を方形または「コ」の字形に配する石組を5基検出した。当初は中・近世墓かと思われたが、下部遺構や蔵骨器等の遺物が検出されなかったことや、石がすべて浮いていることなどから、開墾時に集積されたものと判断した。

A. 縄文時代の遺構

SX1 小谷の東側、3号墳の北東12mに位置する晩期後半の合口土器棺墓。上半が削平されているため遺存状態はあまり良くない。南側のやや小振りの(1)に北側の(2)が被さった状態で検出された。埋土は淡褐色土。やや大きい楕円形の掘形に横位に埋置される。主軸方向はN13°Eである。



第7図 SX1 実測図(1:10)



第8図 遺構平面図 (1 : 200)

B. 飛鳥～奈良時代の遺構

すべて小谷の西側の地区で検出したもので、竪穴住居9棟、掘立柱建物1棟のほか、土坑、溝などを検出した。

1. 竪穴住居

検出した竪穴住居の一覧表を第2表に示す。

SB2 発掘区の西端で一部を検出したため、拡張して全容を確認した。東辺中央よりやや北寄りにカマド跡と思われる焼土が認められた。また、東側約半分は床面が固くたたきしめられていた。

SB4 SB3の南半を切ってつくられた長方形のプランをもつ竪穴住居である。東辺中央やや南寄りにカマド跡と考えられる焼土が残る。南東隅に貯蔵穴をもち、西辺から北辺にかけて浅い周溝がみられる。比較的多くの遺物が出土した。

SB5 SB4の東約4mに位置する。E地区で検出された竪穴住居のなかで最大規模をもつ。北辺中央にカマド跡と考えられる焼土が見られる。カマド部分や南東部を除いて周溝が巡る。四柱穴が明瞭。北東隅に貯蔵穴が見られる。

SB6 SB5の東約6mに位置する。著しく削平されており、東辺は確認できなかった。やはり北辺中央にカマドをもつらしく、焼土が見られた。西辺には浅い周溝が見られた。

SB7 SB6の南3mに位置する。一辺が3m弱の小さな竪穴住居である。

SB11 SB7の南南西5mに位置する。SK12や開墾溝等に切られて、かなり深く掘り下げてプランを検出した。東辺中央やや南寄りにカマド跡と思われる焼土が見られた。

SB13 SB11の南4mに位置する。やはりSK12などに切られてプランは明確ではない。東辺は不明だが、中央やや南寄りのところに焼土が残り、カマド跡と思われる。またその南には貯蔵穴と思われる大ピットがあり、底部に木葉痕のある土師器杯(44)が出土した。

2. 土坑

SK10 SB5の南2.5mに位置する。東西3.0m、南北4.5mほどの楕円形の土坑である。本遺構とSB5出土遺物が接合したものもある。

SK12 SB11およびSB13を切る不定形の大きな土坑である。

SK14 SB13の南東に位置する大きな土坑である

SK16 SB8の南東約2mに位置する。3×4mの規模で竪穴住居の可能性も考えられる。

C. 室町時代の遺構

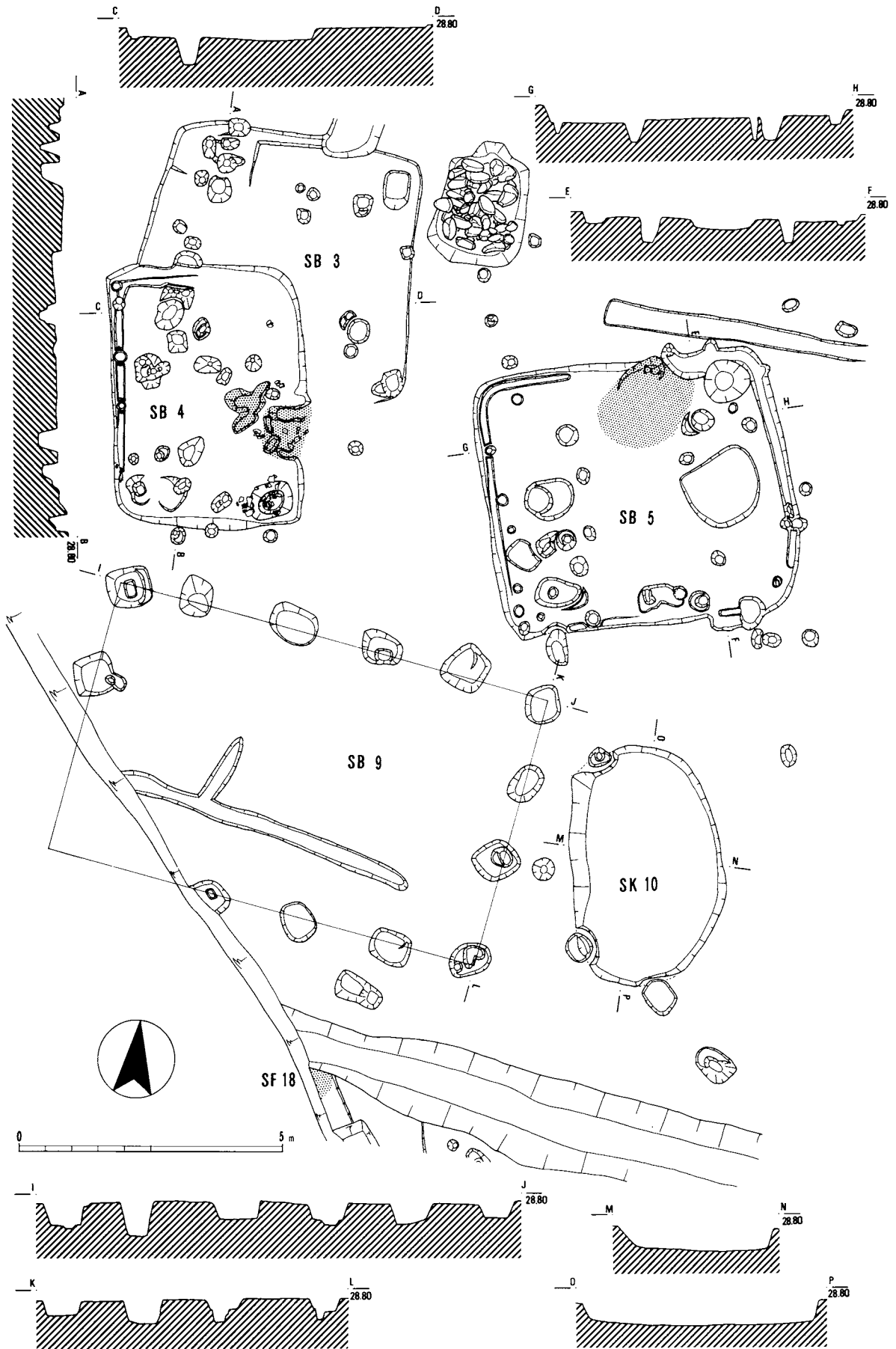
SD17 L字状に曲がる開墾溝に平行するような溝である。幅0.6m、深さ10cmほどの浅いもので、土師器鍋が一個体分出土した。

D. 時期不明の遺構

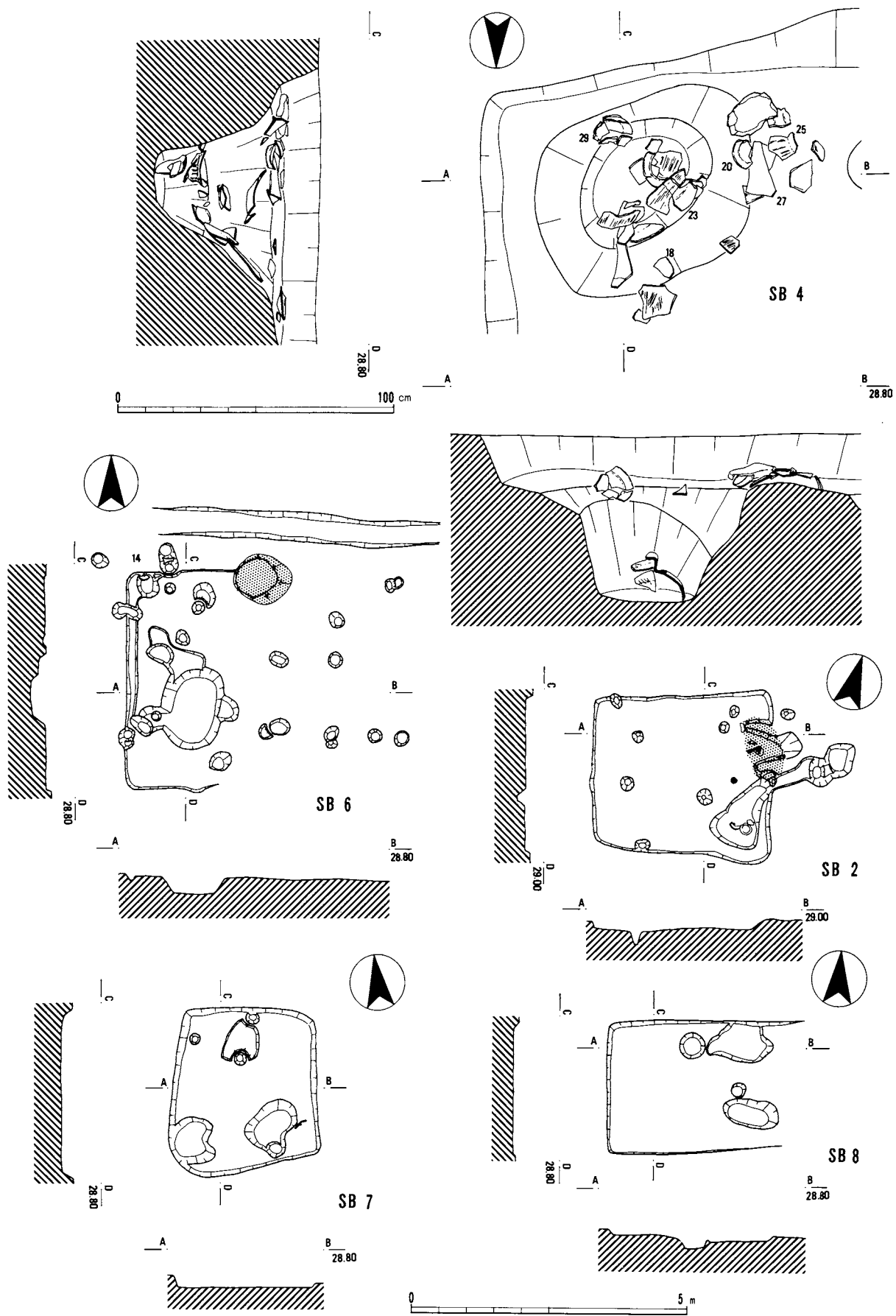
1. 竪穴住居

SB	規模 (m)	長軸方向	深さ (cm)	柱穴	カマド	時期	備考
2	3.2 × 2.8	N 74.0° E	12	○?	東壁	飛鳥	
3	5.0 × (4.8)	N 2.5° W	10	○	×?	不明	SB4に切られる、飛鳥以前
4	3.7 × 5.0	N 7.7° W	20	—	東壁	飛鳥	SB3より新しい
5	5.7 × 5.0	N 74.0° E	25	○	北壁	飛鳥	
6	— × 4.0	N 0.5° E	5	○?	〃	飛鳥	長軸方向は南北軸を基準
7	2.6 × 3.0	N 7.0° E	20	×	×	奈良前期	
8	(3.1) × 2.4	N 85.5° E	10	×	×	不明	出土遺物なし
11	3.3 × 3.9	N 4.0° W	18	×	東壁	飛鳥末～奈良前期	SD19より古い
13	(3.8) × 4.6	N 16.0° W	35	×	〃	奈良前期	SK12より古い

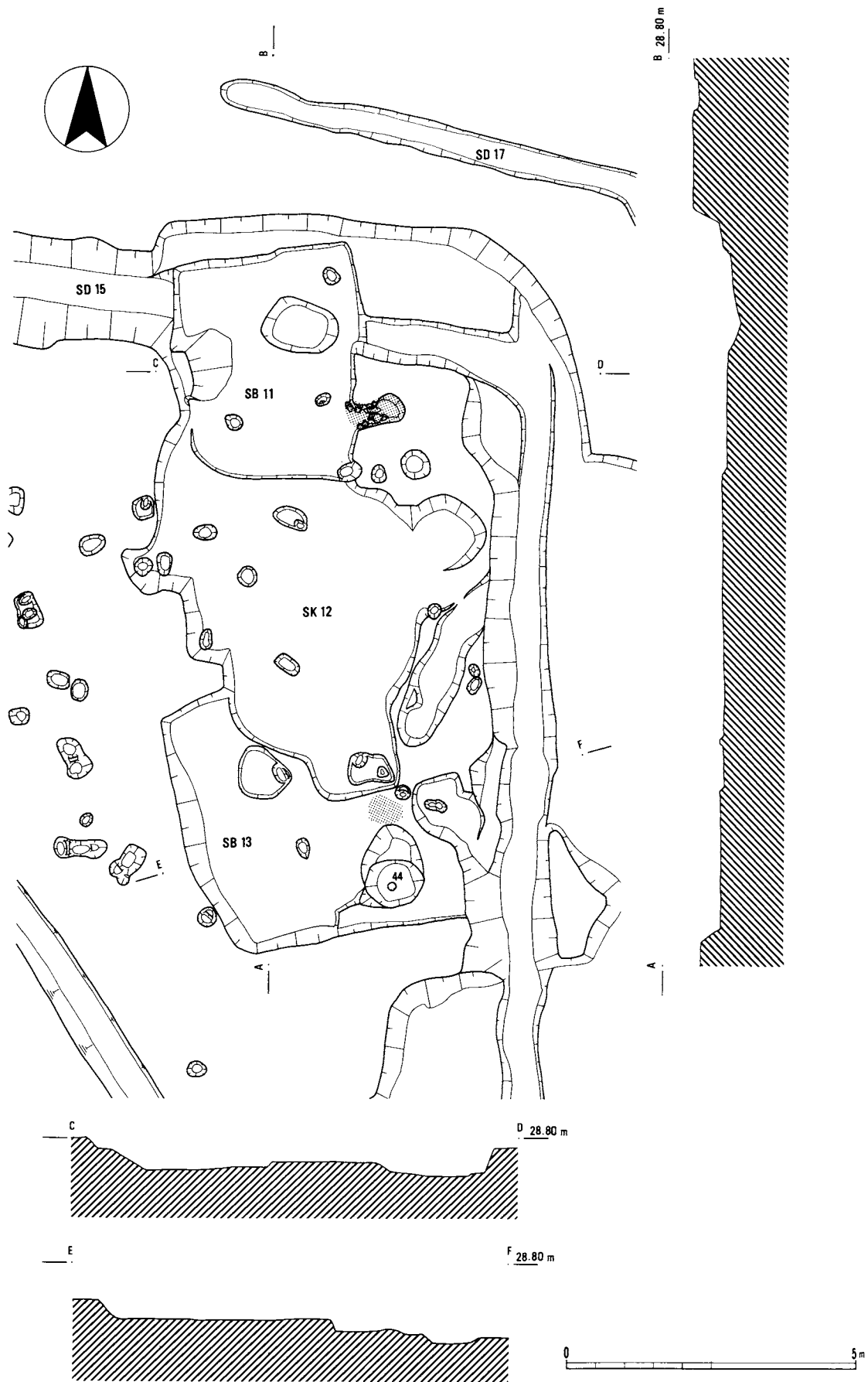
第2表 E地区検出竪穴住居一覧表



第9図 SB 3・4・5・9、SK10実測図 (1:100) 網目は焼土



第10図 SB 2・6・7・8実測図（1:100）、SB 4貯蔵穴遺物出土状況実測図（1:20）網目は焼土



第11図 SB 11・13、SK 12実測図（1 : 100） 網目は焼土

SB3 D地区の調査で一部が検出されていたもので、削平のため遺存状況は悪い。SB2の東2mに位置する。四柱穴が認められる。また一部をSB4に切られる。出土遺物もなく詳細は不明。

SB8 SB7の東2mに位置する。削平が著しく遺存状況は悪い。東辺は確認できなかった。

2. 掘立柱建物

SB9 SB4およびSB5の南約1mに位置する5間×3間の東西棟である。南西部分の一部が発掘区外にひろがるが、柱穴はいずれも60~90cmで方形

を意識してはいるものの、かなり不揃いで不整形なものである。柱間は北側の桁行で1.5+1.7+1.7+1.7+1.7m、東側の梁行で1.7+1.7+1.8mである。また、棟方向はE8°Sである。柱穴からは微量の土器細片が出土したのみで、時期比定できるものはない。

3. 焼土

SF18 SK10の南3mにて検出。開墾溝に切られ、一部は発掘区外である。竪穴住居のカマド跡の焼土であろうか。出土遺物はない。

3. 遺物

コンテナ20箱ほどの遺物が出土した。遺構の中心時期である飛鳥~奈良時代の遺物が多い。その他の時期のものも量的にはすくないものの、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代草創期の有茎尖頭器、同中期・晩期の土器と石器、弥生時代の土器、古墳時代~中世の土器などがあり、バラエティーに富む。詳細は遺物観察表にまとめた。

(1) 遺構出土の遺物

A. 縄文時代の遺物

深鉢 (1・2) 合口土器棺墓SX1に使用されたものである。いずれも口縁部直下と肩部に二枚貝によるD字の刻目をもつ突帯がつく。口縁部はゆるく外反し、端部の面取りはなされていない。二条の突帯間にはていねいにナデられ、肩部突帯以下の体部は上半に右から左へ、下半に下から上への削り調整が施されている。底部は平底で若干立ち上がった後、ゆるく内湾しながら体部へとつづく。いずれも体部外面に煤が付着している。五貫森式に相当する。

B. 飛鳥~奈良時代の遺物

1. SB2出土遺物 (3~9) (3・4)は貯蔵穴、(5)はカマド跡からの出土。土師器甕は口縁端部が上方へつまみあげられる。体部内外面のハケメは全般に細かい。

2. SB5出土遺物 (10~13) 遺物量が少なく図化できたものは4点のみである。土師器甕、須恵器杯身がある。

3. SB6出土遺物 (14~17) (14)は土師器蓋

である。つまみの上面には格子状に、天井部には井桁状に暗文が施される。橙色の精製土器である。

(15)は同様の杯。磨耗が著しく調整方法など不詳であるが、体部内面には放射状暗文がかすかに残る。

4. SB4出土遺物 (18~29) 比較的多くの遺物が出土した。(18・22・23・24・27・29)が貯蔵穴からの出土、(19)がカマド跡からの出土である。

(24)のような体部外面上半にヘラケズリを施す甕や、(27)は、橙色を呈し精良な胎土で暗文をもつ畿内的な土器である。(21・23)などと同様の胎土、色調を呈する甕である。体部外面下半をヘラケズリする。(6)のような当地域で一般的な甕とは全く異なるものであり、(24)などとの関係があろう。なお、この土器はSB11から出土した破片と接合した。

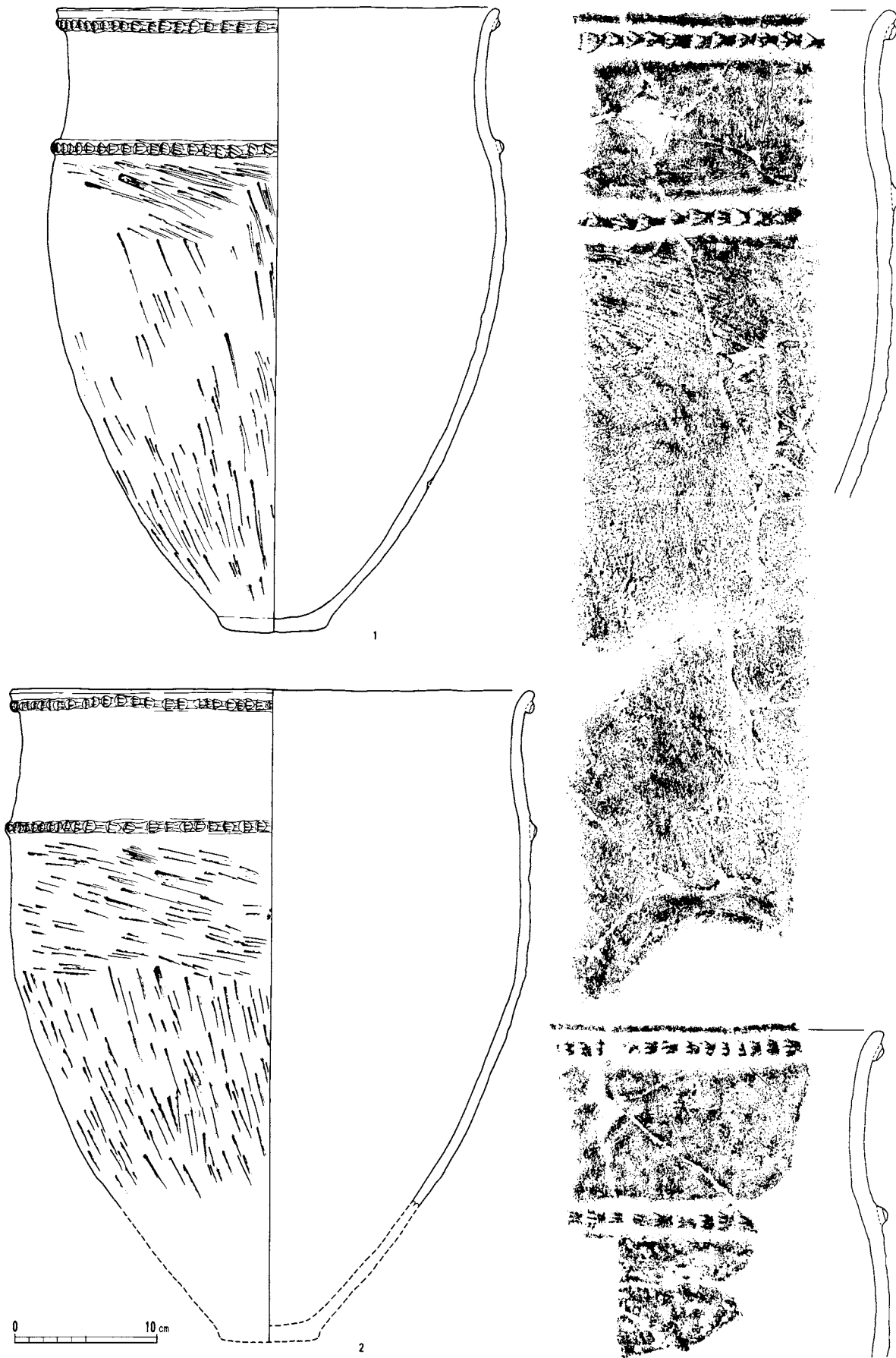
5. SB11出土遺物 (30~42) (41・42)がカマド跡からの出土。甕の口縁部および端部の形態はいろいろあるが、端部をつまみあげないもの(35・36・39・40・42)が多く、つまみあげても目立たないものばかりである。

6. SB7出土土器 (43) 図示した土師器皿1点のみの出土である。

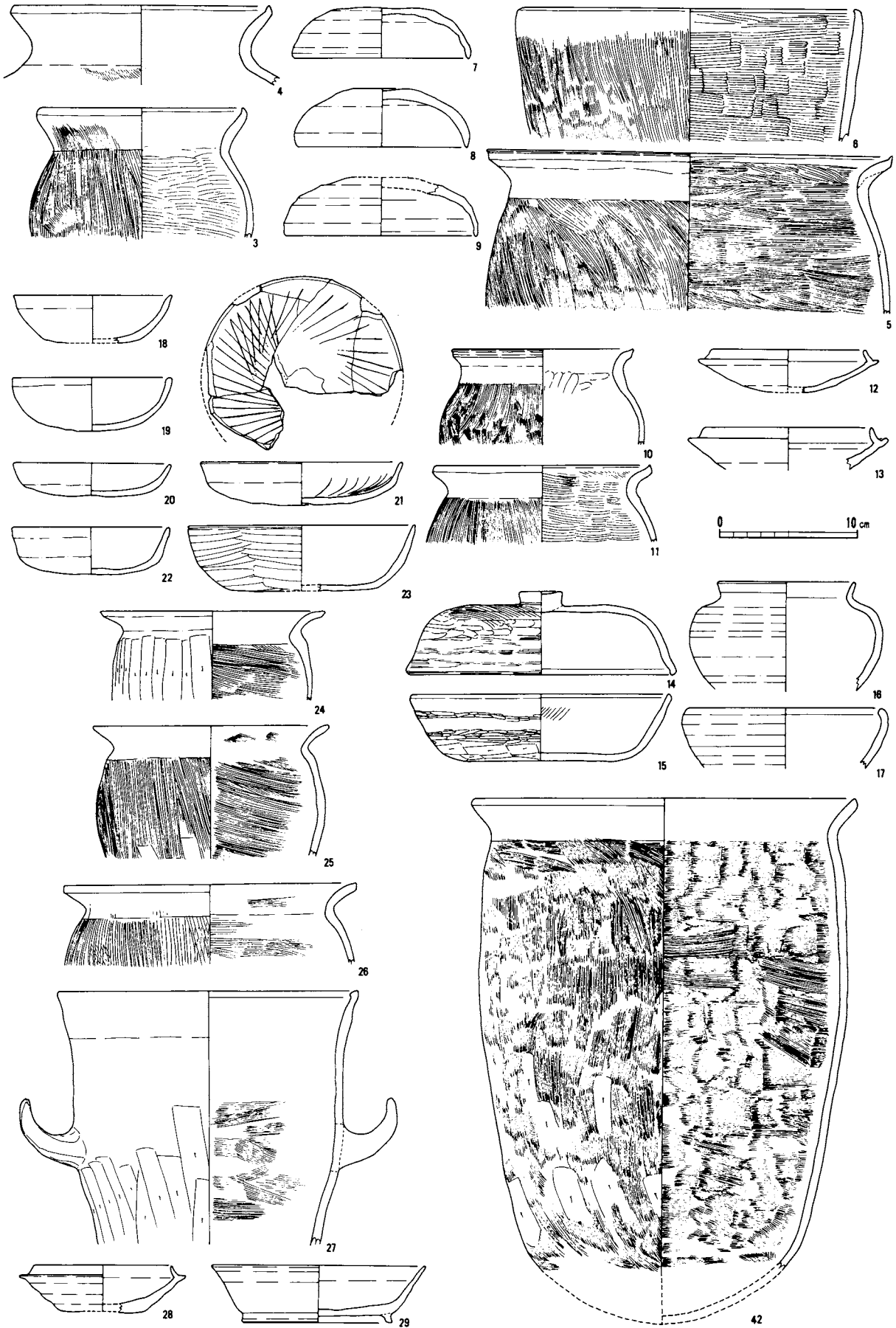
7. SB13出土土器 (44~46) (44)は貯蔵穴と思われる竪穴住居内の土坑から完形で出土したもので、体部外面ヘラケズリ。底部外面に木葉痕がある。

8. SK10出土土器 (47・48) 遺物量は概して少量であった。須恵器の杯蓋、杯身がある。

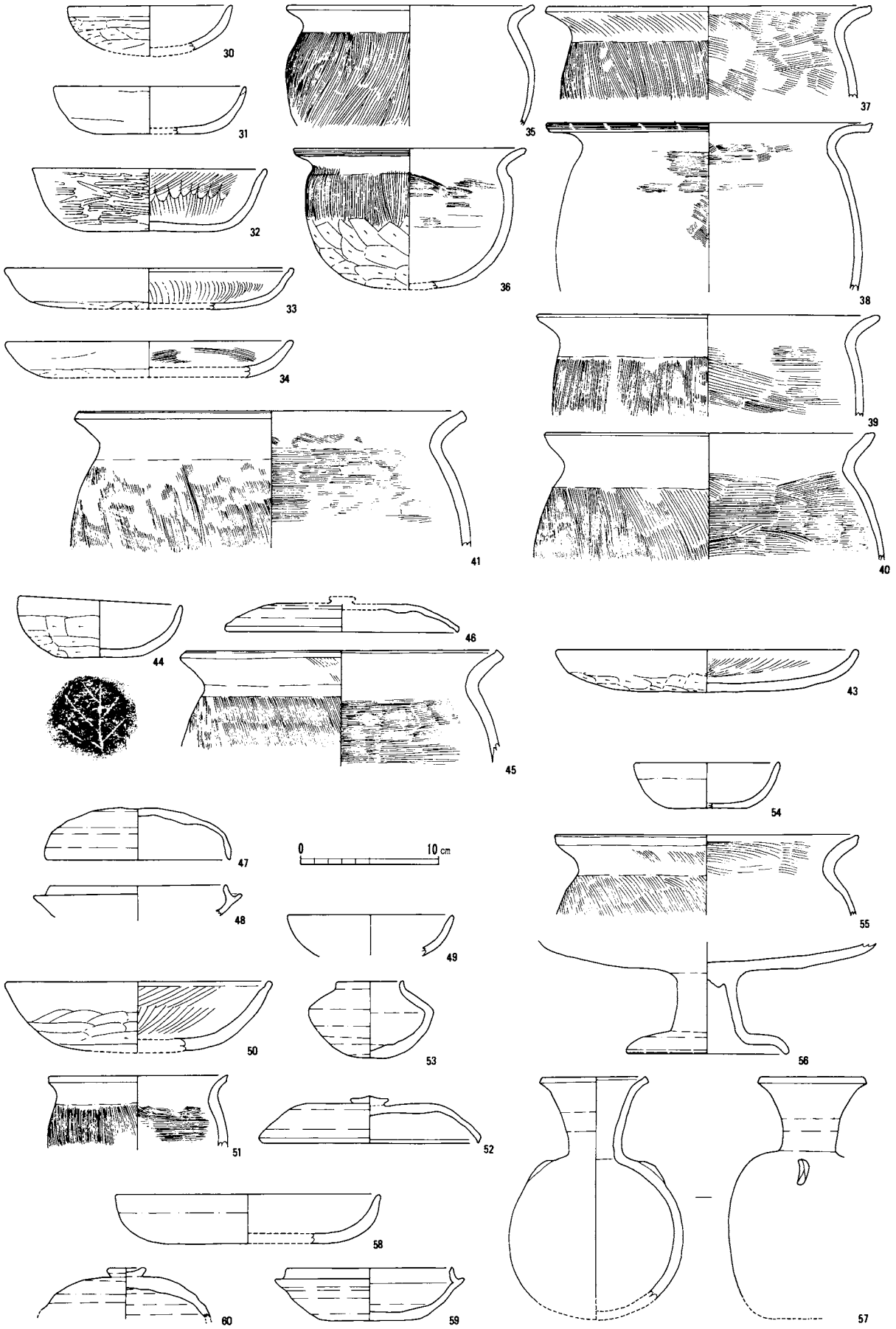
9. SK12出土土器 (49~53) 土師器杯、甕のほか、須恵器蓋、小型の短頸壺がある。



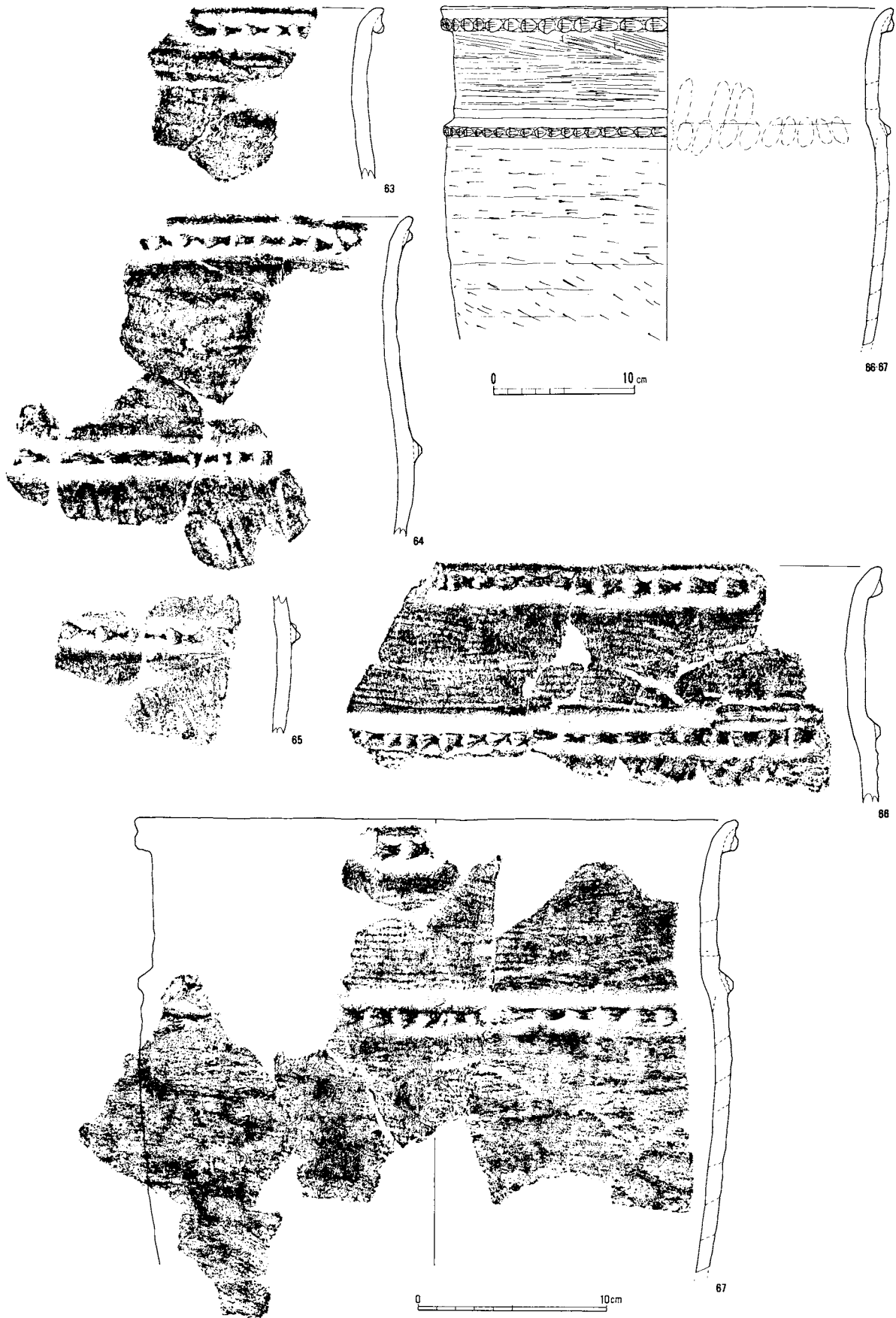
第12図 遺物実測図（1：4）、ただし拓影は1：3



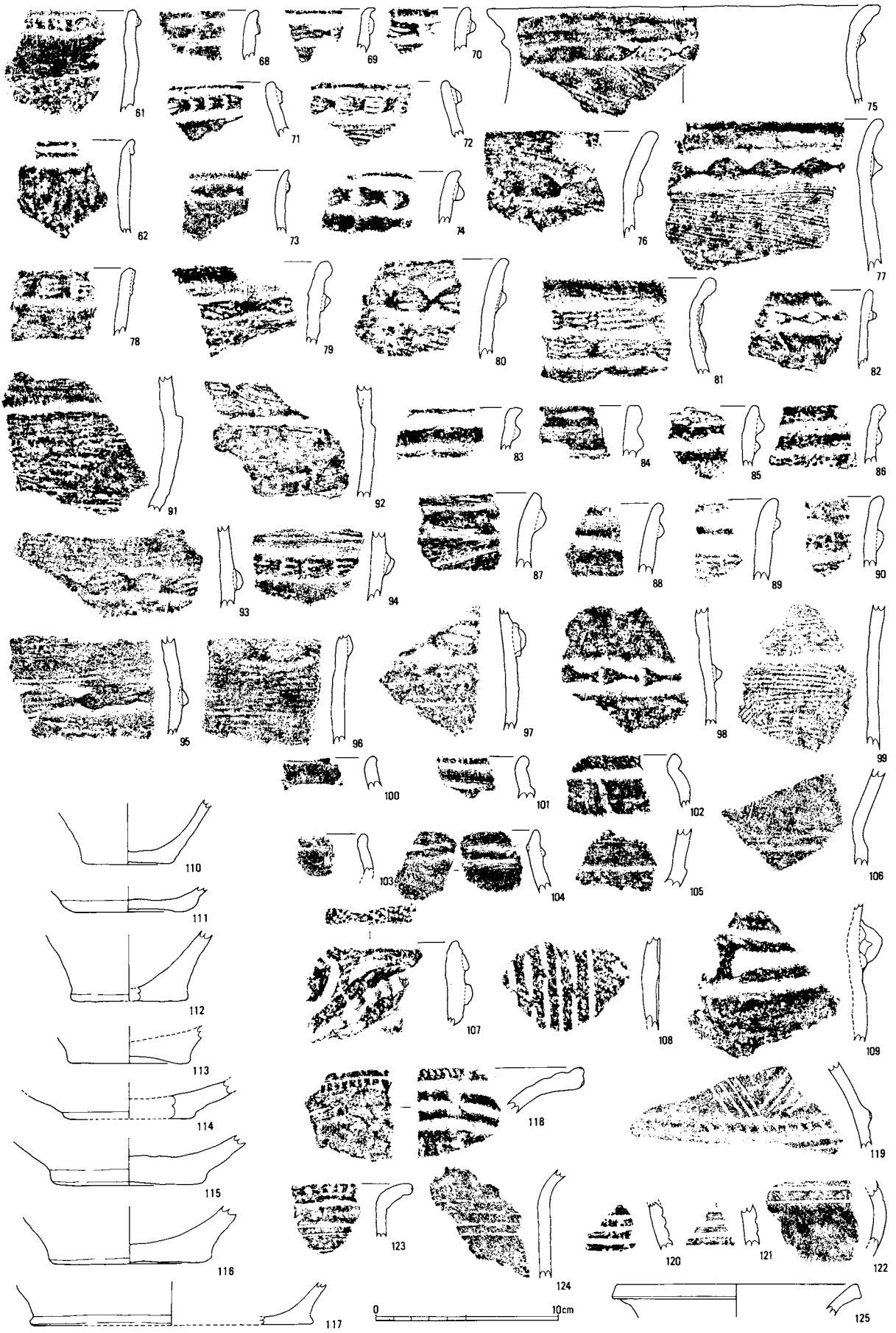
第13図 遺物実測図 (1 : 4)



第14图 遺物実測図 (1 : 4)



第15図 遺物実測図（1：4）拓影は1：3



第16图 遺物実測図・拓影 (1 : 3)

10. SK14出土土器 (54~57) 土師器杯、高杯、甕のほか、須恵器提瓶などがある。

C. その他の土器

(58・59) は土壘状の盛土中より出土したものである。このほか古墳時代から鎌倉時代までの雑多な遺物が出土している。(60) は直径30cmほどの小ピット (Pit. 19) から出土したもの。口縁部を欠くがほぼ完形。磨耗が著しい。

(2) 包含層出土の遺物

A. 縄文時代の土器 (61~117) 大多数が晩期末葉の突帯文土器 (深鉢) で占められる。またそれに伴う浅鉢 (100~106) が若干あるほか、わずか1点ではあるが中期の土器片 (107) もある。

(61) は細い突帯をヘラで刻んだもの。刻目はV字。口唇部は刻まず、明瞭な面どりもみられない。口縁部下の頸部はヨコナデ、肩部には明瞭な境は認められないが、調整技法の変わるところでやや屈曲する。体部はケズリ調整。近畿地方の滋賀里Ⅳ式に類似する。

(62) は壺形になるものか。(63~67) は突帯を口縁部と肩部に付す二条突帯深鉢。いずれも刻みはD字で、(63~65) はヘラ、(66・67) は二枚貝で刻

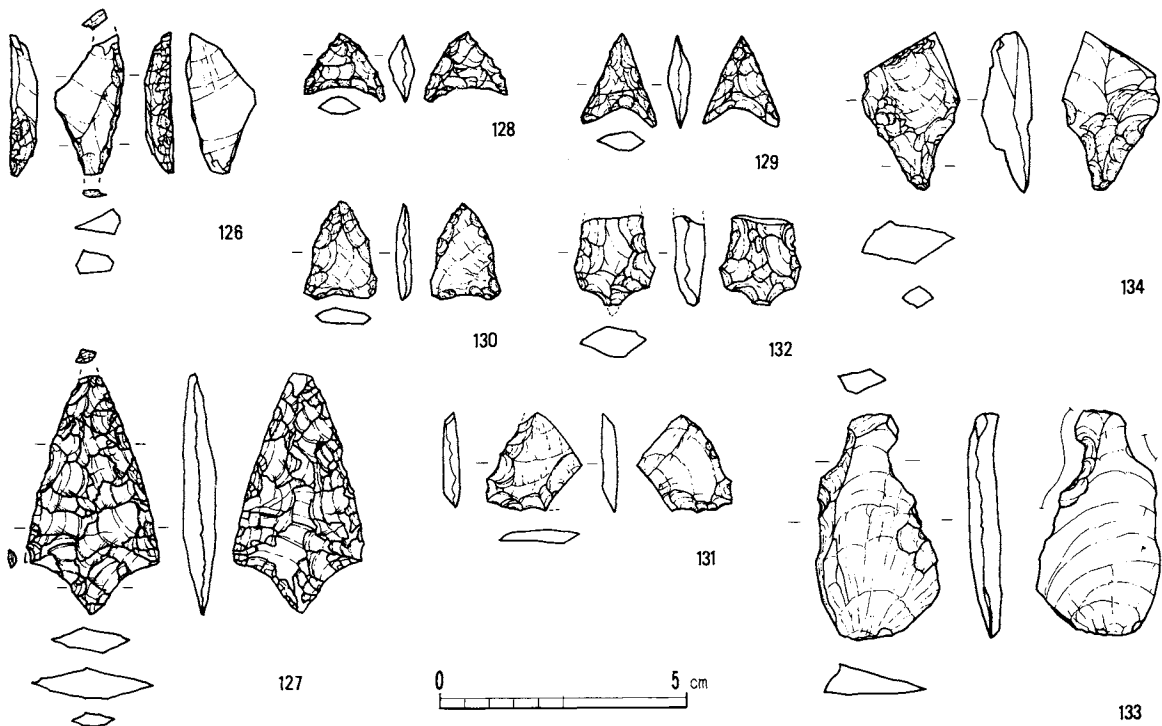
む。また(66・67) は肩部に明瞭な段を有する。なお、(63~65) および(66・67) はそれぞれ同一個体である。

(75~77・79~82) は口縁部からやや下がった位置に突帯が付き、O字に刻むもの。(75~77・82) は指頭で、(79~81) は二枚貝で処理される。(78) は突帯の付く位置が異なる。また(82) もこれとはやや異なるものである。(98) がその体部片かもしれない。(83~90) は素文の突帯をもつものである。

(91~99) は深鉢の体部片。(91・92) は肩部に突帯のつかないもので、段をもつもの。(93~98) は肩部に突帯がつくもの。(94・98) がD字刻みであるほかは、すべてO字刻みである。(99) は二枚貝条痕の施された体部片である。

(100~106) は浅鉢片。いずれも細片である。

(107) は中期に属すると考えられるもの。隆帯区画と沈線および結節沈線が施され、口縁部に縄文が施される。(108) は短沈線が何本か平行して垂下するもの。所属時期を決めかねるが、松阪市小俣道西A遺跡出土の晩期後半突帯文土器の体部に類似するものがあり、この土器片もあるいは晩期に属するものかもしれない。(109) は素文の隆帯が二本



第17図 遺物実測図 (2 : 3)

平行し、そこに素文の小さな橋状把手がつくもの。文様はなく、所属時期を決めかねる。

(110~117)は底部。上げ底のものもあるが、平底で若干立ち上がったのち体部へ続くものが多い。

B. 弥生時代の遺物 (117⁸~124)

前期のもの(118~124)と中期のもの(125)が微量ある。(118)の壺は口縁部内面に二条の浅い凹線の入る、いわゆる垂式の遠賀川式土器と呼ばれるものである。(119)は刻み隆帯をもつ体部片。

(122)はその体部下半である。(120・121)は多条沈線の施された頸部片。(123・124)は甕の破片である。

(125)は中期に属する壺であろう。口縁端部はやや肥厚し面取りがなされている。

C. 石器 (126~134)

表面採集品ではあるが、ナイフ形石器(126)や有茎尖頭器(127)、石鏃(128~132)、石錐(134)などがある。

(126)は中村川流域で初めて確認⁹された旧石器である。チャートの縦長剝片を素材とした切り出し形のナイフ形石器で、右側縁と左側基部に入念にブラントニングをおこなっている。先端部分と基部を一部欠くが、長さ2.84cm、幅1.41cm、厚さ0.58cm、

重さ2.05gである。灰白色を呈する。天保1号墳とSX1のほぼ中間の地山直上で採集。

(127)は縄文時代草創期に属するチャート製の有茎尖頭器。先端部と逆刺の一部を欠くがほぼ完形である。灰色を呈し長さ4.80cm、幅2.65cm、厚さ0.69cm、重さ7.21gである。

石鏃は(128)がチャート製、(132)が下呂石製のほかはすべてサヌカイト製である。(131)は一応石鏃としたが疑問がのこる。(128)は長さ1.28cm、幅1.62cm、厚さ0.45cm、重さ0.61gである。(128)は長さ1.80cm、幅1.52cm、厚さ0.37cm、重さ0.53gである。(130)は長さ1.90cm、幅1.40cm、厚さ0.25cm、重さ0.78gである。(131)は縦1.95cm、横2.0cm、厚さ0.25cm、重さ1.06gである。(132)は先端部を欠くが長さ1.80cm、幅1.64cm、厚さ0.60cm、重さ1.76gである。

(133)は石匙の未製品であろうか。ラフな調整によりつまみ部を作り出して、石匙の意識はみられるが、特に刃部を作り出しているわけでもない。長さ4.55cm、幅2.47cm、厚さ0.55cm、重さ6.21gである。(134)は石錐。先端部の使用痕は顕著ではない。長さ3.10cm、幅1.87cm、厚さ1.00cm、重さ4.20gである。

4. 結 語

E地区はD地区から遺構が連続して続くことが判明した。D地区を北西から南東へ流れ込む浅い谷(E地区の中央を刻む谷へ続く)より南側に飛鳥から奈良時代にかけての集落がひろがっていたことになる。その集落は発掘区内に限って考えてみれば、はじめ南端の段丘崖近くにあったものが、次第に内陸部へと移動していったものと考えられよう。当地における飛鳥時代土器の編年は、まだ細分の段階には至っていないが、SB2・5・6が古い時期に、SB4が末頃に、SB11が末から奈良時代と考えられる。また、E地区においては東西両地区を分ける小谷によって、居住域と墓域が分離していたことも判明した。ただし、縄文時代晩期については、居住を証明する明確な遺構は検出されなかったものの、土器片は西側の地区だけでなく、古墳群の方からも

多くの出土があった。つまり、合口土器棺墓SX1と共存するかたちとなり、墓域と居住域との区別がみられないようで、蛇亀橋遺跡での居住域と墓域とが区別される在り方⁹と対照的である。

ところで今回の調査では、縄文時代晩期末葉の突帯文土器が比較的まとまって出土した。ここで若干のまとめをしておきたい。

三重県内の突帯文系土器出土遺跡の分布相については奥義次氏の集成と論考⁹があるが、それによると突帯文系土器を出土した遺跡は県内で86カ所にのぼる。しかし、そのうちの多くは極微量出土の遺跡であり、まとまった出土量のある遺跡は少ない。それらを東海地方の土器型式による編年(西之山式 ⇨ 五貫森式 ⇨ 馬見塚式)によって分類し遺跡の動向をみると、西之山式期には遺跡数こそ少ないものの、

比較的まとまった量を出土する遺跡があるが五貫森式期を経て馬見塚式期になると、歴然と遺跡規模の縮小と拡散が進むという。

先にあげた突帯文土器大別3型式の序列については細別案^⑧も出されており、盛んに論議され始めたところであり、今後の資料の増加によって研究の進展が期待される。

E地区出土の突帯文土器には西之山式と思われるものは見当たらないが、近畿地方の滋賀里IV式に類似したものから馬見塚式あるいはより新しいと思われるものまである。その中で五貫森式期のものが質的には中心となる。

これらE地区出土土器についてみると、二条突帯化の過程での頸部から体部へかけての屈曲部の変化や突帯の形状、刻目などに着目することによって、おおまかに次の5段階の変遷を考えることができよう。

(I) 細い一条突帯V字刻み(61) ⇔ (II) 一条突帯で肩部に段(91・92) ⇔ (III) 二条突帯D字刻み

で肩部に段(66・67) ⇔ (IV) 二条突帯D字刻みで肩部に段なし(1・2・63~65) ⇔ (V) 二条突帯O字刻み(93・95など)

また、天保遺跡A地区^⑦でも、(V)段階に位置づけられる土器が出土している。すなわち、口縁部に素文の突帯をもち肩部に横長の大きなO字刻みを施した壺形を呈する深鉢である。E地区においても、(75~77・79~81・84~90)のように口縁端部から1.5~3cm下がった位置に偏平なO字突帯かもしくは素文の突帯がつく破片もみられ、突帯文土器の中でも最も新しいものと考えられる。これらは鈴木克彦氏の編年^⑨のIV期(8類で極王式に並行)にあたるものである。ただし、一部についてはIII期(7類で馬見塚式)のものも含まれている。

今回の発掘調査は幅が約50mとはいえ、線的にしか調査できなかったため、集落の面的な広がりや変遷をおさえることはできなかった。今後この東西両側地域での発掘調査を待ちたい。

(田村 陽一)

[註、参考文献]

- ① 新田 洋 「蛇亀橋遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982
- ② 奥 義次 「原始」『飯高町郷土誌』飯高町 1986
- ③ その後、皇學館大学考古学研究会による嬉野町内遺跡詳細分布調査によって、当遺跡南方約1kmの段丘面上に立地する中尾遺跡でナイフ形石器が確認されている。
皇學館大学考古学研究会編『嬉野町の遺跡』皇學館大学考古学研究会 1989
- ④ ①におなじ
- ⑤ 奥 義次 「三重県における凸帯文系土器出土遺跡の分布相」『Mie history vol. 1』三重歴史文化研究会 1990
- ⑥ 鈴木克彦 「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相—伊勢地方からの視点—」『三重県史研究』第6号 三重県 1990
このほか山田 猛氏も三重歴史文化研究会の例会などで編年案を発表されている。

- ⑦ 田村陽一 「天保遺跡A・B地区」『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告—第3分冊6—』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
- ⑧ ⑤におなじ

参考文献

- 澄田正一・大見義一・岩野見司『新編—宮市史』資料編1 一宮市 1970
加藤 修・丹羽佑一他『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会 1973
増子康真 『愛知県を中心とする縄文晩期後半土器型式と関連する土器群の研究』1985
山田 猛 『山田遺跡発掘調査報告—縄文時代編—』東員町教育委員会 1991

遺物番号	登録番号	出土遺構位置	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	遺存度	形態の特徴	技法の特徴	胎土	焼成	色調	図番号	図版番号
3	7-2032	H-100 SB2 貯蔵穴	土師器 甕	(15.0)		-	$\frac{2}{5}$	口縁部の外反度弱い 口縁部上方へつまみ上げ	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ(5~6本/cm)	やや粗	並	にぶい橙 5YR7/4	13	12
4	7-2030	"	"	(18.8)		-	口縁 完存	"	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(6本/cm)	並	良	浅黄橙 10YR8/4	"	"
5	7-2031	H-100 SB2 カマド	"	(29.9)		-	$\frac{1}{3}$	口縁部肥厚 口縁部上方へつまみ上げ	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(6本/cm) 内面ハケメ(7本/cm)	"	"	"	"	"
6	7-2033	H-100 SB2 貯蔵穴	土師器 甕	(24.4)		-	$\frac{1}{6}$	口縁部やや内折 体部は直線的な立ち上がり	口縁部外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ(5本/cm)	"	並	浅黄橙 10YR8/3	"	"
7	7-2034	H-100 SB2, No.1	須恵器 杯蓋	12.6	4.2	-	ほぼ 完形	天井部からゆるやかに 口縁部へ移る	ロクロナデ、ロクロ回転左回り 天井部ヘラ切り後ナデ	"	"	灰 6.5Y6/1	"	"
8	7-2035	H-100 SB2 の1	"	(12.3)	4.0	-	$\frac{2}{3}$	全体に器厚が厚く、鈍い 感じを受ける	ロクロナデ、ロクロ回転右回り 天井部ロクロケズリ	"	不良	灰 5Y5/1	"	"
9	7-2036	H-100 SB2	"	(13.6)	(4.3)	-	$\frac{1}{3}$	やや大ぶり	"	良・砂	並	"	"	"
10	7-2042	J-102 SB5	土師器 甕	(13.0)		-	$\frac{1}{4}$	口縁部やや短く、外反 口縁部上方へつまみ上げ	口縁部内外面ヨコナデ 体部上半ハケメ(8本/cm)下 半ハケメ(12本/cm)内面ナデ	並	"	にぶい橙 7.5YR7/4	"	13
11	7-2041	J-102 SB5 床面	"	(15.5)		-	$\frac{1}{3}$	口縁部外反 口縁部上方へつまみ上げ	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ(5本/cm)	粗	不良	浅黄橙 10YR8/3	"	"
12	7-2043	J-102 SB5 埋土	須恵器 杯身	(11.0)		-	$\frac{1}{4}$	器厚薄く、浅い	ロクロナデ 底部ヘラ切り	並	良	黄灰 2.5Y6/1	"	"
13	7-2044	K-102 SB5 内 Pit. 3	"	(12.0)		-	$\frac{1}{12}$	"	ロクロナデ	良	"	灰白 5Y7/1	"	"
14	7-2037	L-102 SB6 北西スミ	土師器 蓋	19.4	5.9	-	$\frac{1}{2}$	口縁部内側に沈線	底部外面に格子状の暗文風ミ ガキ つまみ上面も同様のミガキ	"	"	橙 5YR7/6	"	"
15	7-2038	L-103 SB6 南西スミ	土師器 杯	18.6	4.9	-	$\frac{1}{2}$	底部から体部への立ち 上がりは明瞭	底部外面ヘラケズリ、体部外面 ヘラケズリ、体部内面放射 状暗文2段か	"	"	"	"	"
16	7-2039	M-102 SB6	須恵器 短頸壺	(9.8)		-	$\frac{1}{4}$	短かい口縁部がやや外 方へ立ち上がる、自然 釉	ロクロナデ、ロクロ回転右回り 体部下半ロクロケズリ	"	"	灰 10Y4/1	"	"
17	7-2040	L-102 SB6	須恵器 鉢	(14.0)		-	$\frac{1}{6}$	口縁部内湾	ロクロナデ	並	並	灰白 2.5Y8/2	"	"
18	7-2009	H-101 SB4 貯蔵穴 No.3	土師器 杯	(11.4)	(3.5)	-	$\frac{1}{4}$	口縁部突起気味でやや 外反、底部は平底にち かいかい	口縁部内外面ヨコナデ 体部~底部内外面乱ナデ	"	良	橙 7.5YR7/6	"	14
19	7-2006	H-101 SB4 カマド No.1 群	"	11.6	3.9	-	完形	口縁部丸く肥厚 粘土紐接合痕残る	口縁部内外面ヨコナデ? 全体に磨耗著しい	"	"	明黄褐 10YR7/6	"	13
20	7-2003	H-101 SB4, No.4	"	11.6	2.4	-	"	器高低い 体部の立ち上がりゆる やか	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ、乱ナデ やか	良	"	黄橙 10YR8/6	"	"
21	7-2010	H-101 SB4 埋土	"	14.6	3.2	-	$\frac{1}{2}$	口縁部やや外反 放射状暗文	口縁部内外面ヨコナデ 底部内外面乱ナデ	"	"	橙 7.5YR7/6	"	"
22	7-2005	H-101 SB4 貯蔵穴 No.4	"	11.4	3.4	-	"	器高やや高い	口縁~体部内外面ヨコナデ 底部内外面乱ナデ	"	"	浅黄橙 10YR8/3	"	"
23	7-2008	H-101 SB4 貯蔵穴 No.2	"	(16.4)	4.8	-	$\frac{1}{3}$	口縁部外面に沈線、底 部から、ゆるく内彎 味に立ち上がる。暗文 あり?磨耗のため不明	口縁部~体部ヘラミガキ 底部外面ヘラケズリ	"	"	橙 7.5YR6/8	"	"
24	7-2004	H-101 SB4 貯蔵穴 の肩	土師器 甕	16.2		-	$\frac{1}{2}$	口縁部つよく外反 体部はつよくはならない	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ハケメ(14本/1.8cm)	"	"	橙 7.5YR7/6	"	14
25	7-2012	H-101 SB4 貯蔵穴 No.6	"	(17.0)		-	$\frac{1}{3}$	口縁部“く”字状に外 反し丸くおさまる	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(8本/cm、13 本/1.1cm) 体部内面ハケメ(22本/cm)	並	"	にぶい黄橙 10YR7/4	"	"
26	7-2007	H-101 SB4 5群	"	(23.0)		-	$\frac{1}{4}$	口縁部外彎気味に外反 端部に面もつ	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(4本/cm) 体部内面ハケメ(5本/cm)	粗	"	浅黄橙 10YR8/3	"	"
27	7-2002	H-101 SB4 貯蔵穴 No.5 K-106SB11	土師器 甕	(22.0)		-	$\frac{1}{3}$	口縁部上端に面をもつ 口縁部内面に沈線	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面上半ナデ下半ヘラケ ズリ、体部内面ハケメ(8本/ cm)のちナデ	良	"	黄橙 7.5YR7/8	"	"
28	7-2011	H-101 SB4	須恵器 杯身	10.0	3.3	-	$\frac{1}{5}$	底部平坦 自然釉	ロクロナデ 底部ヘラ切り未調整	"	"	灰黄 2.5Y6/2	"	"
29	7-2001	H-101 SB4 貯蔵穴 No.1	須恵器 杯	15.5	4.2	10.8	$\frac{1}{2}$	口縁部斜め上方へ直線 的に立ち上がる、しっ かりした高台	ロクロナデ、ロクロ回転左回り 底部ロクロケズリ	並	"	黄灰 2.5Y6/1	"	15
30	7-2024	K-106 SK11 埋土	土師器 碗	(11.8)		-	$\frac{1}{4}$	やや厚手	口縁部内外面ヨコナデ 体部~底部外面ヘラケズリ	"	"	橙 7.5YR6/6	14	14
31	7-2027	K-106 SK11	土師器 杯	(13.8)	3.5	-	$\frac{1}{9}$	底部から内彎気味に立 ち上がる。粘土接合痕 残る	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ナデ	"	並	淡黄 2.5Y8/3	"	"
32	7-2020	L-106 SK11	"	(16.8)	4.6	-	$\frac{3}{5}$	口縁部内面に沈線	体部外面ヘラミガキ 底部外面ヘラケズリ 内面(体~底部)に暗文	良	良	橙 5YR7/6	"	"

第3表 遺物観察表1

遺物番号	登録番号	出土遺構位置	器 種 形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	遺存 度	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	図 番 号	図 版 番 号
33	7-2022	K-106 SK11	土師器 皿	(21.0)	(3.0)	-	$\frac{1}{8}$	口縁部内面に沈線	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 体部内面に放射状暗文	良	良	橙 7.5YR7/6	14	14
34	7-2025	"	"	(21.0)	(2.6)	-	"	底部から体部への立ち 上がりゆるやか	口縁部内外面ヨコナデ 口縁部体部内面ハケメ(9本/ cm)残る 底部外面ナデ	並	並	淡黄 2.5Y8/3	"	"
35	7-2014	K-105 SK11	土師器 甕	(17.8)		-	$\frac{1}{4}$	口縁部外弯気味に外 反し、端部は若干玉縁 状	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(6本/cm)	"	"	"	"	"
36	7-2013	K-106 SK11	"	(16.5)	(10.3)	-	$\frac{1}{7}$	口縁部外反、端部はそ のままおさまる	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面上半ハケメ(5本/cm) 下半ヘラケズリ、体部内面上 半ハケメ(11本/cm)	粗	"	にぶい黄橙 10YR7/4	"	"
37	7-2019	K-106 SK11 カマド	"	(23.6)		-	$\frac{1}{8}$	口縁部外反、端部はや や上方へつまみ上げ	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ(7本/cm) 一部ヘラケズリ	並	良	浅黄橙 10YR8/4	"	"
38	7-2015	K-106 SK11	"	(23.8)		-	$\frac{1}{10}$	口縁部外反度強い	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(11本/cm) 体部内面ハケメ(7本/cm)が 残る	粗	不良	浅黄 2.5YR8/3	"	"
39	7-2018	"	"	(25.0)		-	$\frac{1}{6}$	口縁部外反、端部は 面もたない	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ	並	並	浅黄橙 7.5YR8/4	"	"
40	7-2016	"	"	(24.2)		-	"	口縁部外反度弱い 水平方向に面もつ	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ(7本/cm)	"	"	浅黄橙 10YR8/4	"	"
41	7-2017	K-106 SK11カマド	"	(28.0)		-	$\frac{1}{9}$	口縁部外反、端部に 面もつ	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(7本/cm) 体部内面ハケメ(10本/cm)	"	"	浅黄橙 7.5YR8/3	"	"
42	7-2029	"	土師器 長胴甕	(27.4)		-	$\frac{1}{4}$	口縁部外反度弱く、端 部は面をもたない 体部外面付煤	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ(15本/cm) 体部外面下半一部ヘラケズリ	良	良	にぶい黄橙 10YR7/4	13	15
43	7-2045	L-104 SB7	土師器 皿	(11.6)		-	$\frac{1}{10}$	底部と体部の界不明瞭	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 放射状暗文	並	並	橙 5YR6/8	14	"
44	7-2053	J-108 SK13内土坑	土師器 杯	11.7	4.2	-	完形	底部の平坦面せまい 底部外面に木葉痕	口縁部内外面ヨコナデ 底部体部外面ヘラケズリ	粗	"	橙 7.5YR6/6	"	"
45	7-2054	J-108 SK13	土師器 甕	(22.4)		-	$\frac{1}{7}$	口縁部上方へつまみ 上げ	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(6本/cm) 体部内面ハケメ(10本/cm)	並	"	にぶい橙 7.5YR7/4	"	"
46	7-2056	J-108 SK13	須恵器 蓋	(16.7)		-	$\frac{1}{10}$	つまみ欠損	ロクロナデ・ロクロ回転右回 り 天井部ロクロケズリ	"	良	灰白 5Y7/2	"	"
47	7-2052	J-104 SK10	"	(13.2)	3.8	-	$\frac{1}{4}$	つまみなし	ロクロナデ、ロクロ回転右回 り 底部(天井部)ヘラ切り後未調 整	"	不良	灰 7.5Y5/1	"	"
48	7-2051	J-104 SK10	須恵器 杯身	(12.7)		-	$\frac{1}{5}$		ロクロナデ、ロクロ回転不明	"	並	灰白 10Y7/1	"	"
49	7-2049	K-107 SK12	土師器 碗	(11.9)		-	$\frac{1}{10}$		口縁部内外面ヨコナデ	"	不良	淡黄 2.5Y8/3	"	"
50	7-2050	"	土師器 杯	(19.0)	(5.2)	-	$\frac{1}{8}$	口縁部内側に沈線	口縁部内外面ヨコナデ 底部体部外面ヘラケズリ 放射状暗文(2段)	良	並	橙 5YR6/6	"	"
51	7-2048	"	土師器 甕	(12.8)		-	$\frac{1}{10}$	口縁部外反度弱い	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ(8~9本/ cm)	並	"	浅黄橙 10YR8/3	"	"
52	7-2047	J-108 SK12	須恵器 蓋	(17.6)	3.5	-	$\frac{1}{6}$	扁平なつまみつく 口縁部端部やや内折	ロクロナデ、ロクロ回転右回 り 天井部ロクロケズリ	"	良	灰 7.5Y6/1	"	16
53	7-2046	"	須恵器 短頸壺	6.8	5.6	-	完形	小型 肩部つよく張る	ロクロナデ、ロクロ回転右回 り 底部体部ロクロケズリ	良	"	灰オリーブ 5Y6/2	"	"
54	7-2059	K-108 SK15	土師器 杯	(10.4)	3.5	-	$\frac{1}{3}$	器高やや高く底部は平 坦	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ナデ	"	"	浅黄橙 7.5YR8/6	"	15
55	7-2058	J-109 SK14	土師器 甕	(21.8)		-	$\frac{1}{8}$	口縁部は外弯気味に外 反 体部の器厚薄い	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(6本/cm) 口縁部内面ハケメ(6本/cm) 残る	"	"	浅黄橙 7.5YR8/4	"	"
56	7-2061	L-108 SK14	土師器 高杯			11.8	$\frac{1}{4}$	脚部は底部近くで大き く外へ開き、内弯する	杯部外面ヘラケズリ、内面に 暗文か 脚部ナデ、端部内外面ヨコナ デ	"	"	橙 7.5YR7/6	"	16
57	7-2060	K-109 SK14	須恵器 提瓶	(7.4)		-	$\frac{1}{2}$	頸部から口縁部へ逆ハ の字状に開く。痕跡的 な環がつく	ロクロナデ	並・砂	並	灰黄 2.5Y6/2	"	"
58	7-2063	K-105 土壘中	土師器 皿	(19.0)		-	$\frac{1}{2}$	全体に厚手	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ	"	"	浅黄橙 7.5Y8/6	"	15
59	7-2062	K-110 土壘内	須恵器 杯身	(12.0)	3.9	(7.4)	$\frac{1}{5}$	立ち上がりは外弯気味 に直立 底部平坦	ロクロナデ 底部ヘラ切り後ナデ	並	良	黄灰 2.5Y6/1	"	"
60	7-2065	K-104 Pit. I	須恵器 杯蓋			-	$\frac{4}{5}$	扁平で中央部の凹んだ つまみつく	ロクロナデ、ロクロ回転右回 り 天井部3分の2ロクロケズリ	良	"	灰白 7.5Y7/1	"	16

※法量欄の()は推定値を表す。

※色調の観察には、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1988を使用した。

第4表 遺物観察表2

土器 No.	遺物 No.	出土位置	時期	器種	部位	器厚 (mm)	文様・施文等	器面調整		胎土	焼成	色調		図 番号	図版 番号
								外面	内面			外面	内面		
61	7-2146	S112黒色土	晩・後	深鉢	口	6	口縁部突帯ヘラV字刻み	ロ→ナ デ体→ケズリ	ナ デ	粗・砂	不良	にぶい黄橙 10YR7/3	左 同	16	17
62	7-2118	1~3号墳間 表土	"	壺?	"	4 ~5	口縁部折り返し状、素文の細い 突帯	ミガキ	ミガキ	精・砂 ・金	良	灰黄 2.5Y6/2	浅黄 2.5Y7/4	"	"
63	7-2073	U112 落ち込み	"	深鉢	"	8	口縁部突帯ヘラD字刻み	ナ デ	ナ デ	並・砂	"	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい黄橙 10YR7/4	15	"
64	"	"	"	"	口 ~肩	7 ~8	口縁部、肩部突帯ヘラD字刻み	ロ→ナ デ体→ケズリ	"	"	"	"	"	"	"
65	"	T112黒色土	"	"	肩	"	肩部突帯ヘラD字刻み	"	"	"	"	"	"	"	"
66	7-2074	U112 落ち込み	"	"	口 ~肩	8 ~10	口縁部、肩部突帯二枚貝D字刻 み	ロ→条 痕体→ケズリ	"	良・砂	不良	灰黄褐 10YR5/2	黒褐 2.5Y3/1	"	16
67	"	T112 落ち込み	"	"	口 ~体	7 ~10	"	"	"	"	"	"	"	"	"
68	7-2121	J108SK13	"	"	口	6	口縁部突帯二枚貝D字刻み	ナ デ	"	並・砂	良	赤褐 5YR4/6	にぶい赤褐 5YR5/4	16	17
69	7-2088	R115表土	"	"	"	4 ~6	"	"	"	"	不良	にぶい橙 7.5YR6/4	左 同	"	"
70	7-2126	1号墳南表土	"	"	"	6	"	"	"	精・砂	良	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR5/2	"	"
71	7-2120	R115表土	"	"?	"	"	"	"	"	並・砂	"	にぶい黄橙 10YR7/4	黄褐 2.5Y5/3	"	"
72	7-2132	G102Pit 1	"	"?	"	5 ~6	"	条 痕	"	良・砂	"	褐 10YR4/4	黒褐 10YR3/1	"	"
73	7-2151	3号墳南表土	"	"	"	5	口縁部突帯O字刻み?	ナデ?	"	並・砂	不良	にぶい黄褐 10YR5/6	にぶい黄褐 10YR4/3	"	"
74	7-2129	L106SK11	"	"	"	5 ~6	口縁部突帯D字刻み	ナ デ	"	"	並	にぶい黄橙 10YR7/3	左 同	"	"
75	7-2145	6号墳掘形	"	"	"	5 ~8	口縁部突帯ユビO字刻み	ロ→ナデ 頸→条痕	"	"	良	にぶい橙 7.5YR6/4	"	"	"
76	7-2125	1号墳南表土	"	"	"	6 ~9	口縁部突帯痕跡的、ユビ刻み	ナ デ	"	"	"	明褐 7.5YR5/6	橙 7.5YR6/8	"	"
77	7-2123	1号墳北東部 墳丘	"	"	"	6 ~7	口縁部突帯ユビO字刻み	ロ→ナデ 頸→条痕	"	"	並	にぶい黄褐 10YR5/4	橙 7.5YR6/6	"	"
78	7-2131	J108SK13	"	"	"	"	口縁部突帯二枚貝D字刻み	条 痕	"	精	良	にぶい黄褐 10YR5/3	左 同	"	"
79	7-2136	6号墳石室	"	"	"	7 ~8	口縁部突帯二枚貝O字刻み	ロ→ナデ 頸→条痕	"	並・砂	"	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR6/6	"	"
80	7-2128	J107SK12	"	"	"	6 ~7	"	"	"	精・砂	"	明赤褐 5YR5/6	左 同	"	"
81	7-2133	1号墳南東表 土	"	"	"	"	口縁部二条突帯二枚貝O字刻み	ナ デ	"	並・砂	"	褐 7.5YR4/3	にぶい褐 7.5YR5/4	"	"
82	7-2135	7号墳石室	"	"	肩	4 ~5	肩部突帯ユビO字刻み	"	"	精・砂	"	にぶい黄褐 10YR4/3	橙 5YR6/8	"	"
83	7-2130	1号墳西南表 土	"	"	口	6	口縁部素文突帯	"	"	"	"	明黄褐 10YR6/6	左 同	"	"
84	7-2086	1号墳盛土	"	"	"	6 ~8	" 端面取り	"	条 痕	並・砂	並	にぶい橙 7.5YR6/4	"	"	"
85	7-2124	M107 付近表探	"	"	"	7 ~8	口縁部素文突帯(2条)	"	ナ デ	精・砂	不良	褐灰 10YR4/1	灰黄褐 10YR6/2	"	"
86	7-2119	1~3号 墳間表探	"	"	"	6 ~7	口縁部素文突帯、端部肥厚	"	"	良・砂	良	にぶい黄橙 10YR7/3	左 同	"	"
87	7-2098	U112 落ち込み	"	"	"	8	口縁部素文突帯	"	"	並・砂	"	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR5/2	"	"
88	7-2087	土塁内側表土	"	"	"	7 ~8	"	"	"	良	"	灰黄褐 10YR6/2	左 同	"	"
89	7-2095	1号墳東土塚 2	"	"	"	9	"	ロ→ナデ 頸→条痕	"	粗・砂	"	にぶい褐 7.5YR5/4	"	"	"
90	7-2094	J~K106 SK11	"	"	"	6 ~7	"	ナ デ	"	"	不良	にぶい橙 7.5YR6/4	"	"	"
91	7-2108	3号墳南表土	"	"	肩	7 ~8	肩部に段	頸→ナ デ体→ケズリ	"	"	"	黄褐 2.5Y5/3	"	"	"
92	7-2137	J104SK10	"	"	"	6 ~7	"	"	"	精・砂	良	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	"	"
93	7-2139	1号墳南表土	"	"	"	"	肩部に突帯二枚貝O字刻み	頸→条 痕体→ケズリ	"	並・砂	"	褐 7.5YR4/4	明褐 7.5YR5/6	"	"

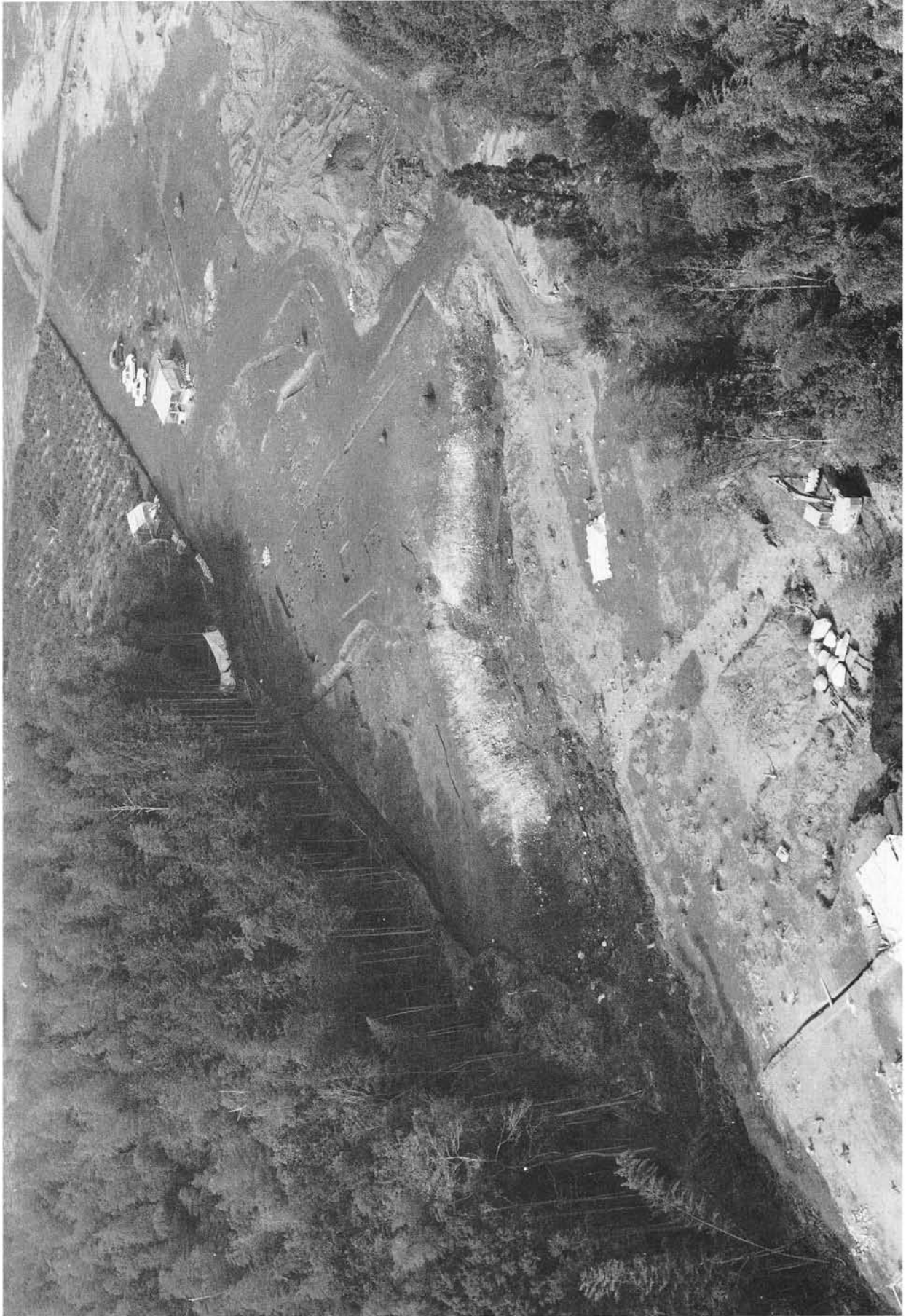
第5表 遺物観察表3

土器 No.	遺物 No.	出土位置	時期	器種	部位	器厚 (mm)	文様・施文等	器面調整		胎土	焼成	色調		図 番号	図版 番号
								外面	内面			外面	内面		
94	7-2143	表土	晩・後	深鉢	肩	6 ~8	肩部に突帯二枚貝D字刻み	頸→条痕 体→ケズリ	ナデ	並・砂	良	浅黄 2.5Y7/3	暗灰黄 2.5Y5/2	16	17
95	7-2138	1号墳南東表土	〃	〃	〃	5 ~8	肩部に突帯二枚貝O字刻み	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10YR5/3	明褐 7.5YR5/6	〃	〃
96	7-2144	〃	〃	〃	〃	6 ~7	〃	条痕	〃	粗・砂	〃	明褐 7.5YR5/6	左同	〃	〃
97	7-2148	1号墳東トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ケズリ	〃	並・砂	不良	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃
98	7-2134	1号墳北西表土	〃	〃	〃	5 ~7	肩部に突帯ヘラD字刻み	頸→ナデ 体→ケズリ	〃	精・砂	良	褐 10YR4/6	左同	〃	〃
99	7-2085	1号墳表土	〃	〃	体	6 ~7	二枚貝条痕	条痕	〃	粗・砂	不良	橙 5YR6/6	〃	〃	〃
100	7-2092	1号墳北東トレンチ	〃	浅鉢	口	7	〃	ミガキ	ミガキ	並	良	にぶい橙 7.5YR6/4	〃	〃	〃
101	7-2091	J109 SK14	〃	〃	〃	7 ~8	口縁部外面に刻みか	ナデ	ナデ	並・砂	〃	にぶい橙 7.5YR7/4	〃	〃	〃
102	7-2107	3号墳南表土	〃	〃	〃	6 ~7	口縁端部外折	ミガキ	ミガキ	〃	不良	黄褐 2.5Y5/3	〃	〃	〃
103	7-2147	〃	〃	〃	〃	5	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10YR4/3	〃	〃	〃
104	7-2142	U112 落ち込み	〃	〃	〃	7	口縁部内外面に微隆帯	〃	〃	良	並	にぶい黄褐 10YR5/3	黒褐 10YR2/3	〃	〃
105	7-2090	3号墳周辺表土	〃	〃	頸	7 ~8	肩部に段	頸→ナデ 体→ケズリ	ナデ	並・砂	不良	浅黄橙 10YR8/4	灰黄褐 10YR6/2	〃	〃
106	7-2097	3号墳南表土	〃	〃	〃	7	肩部の段弱い	〃	〃	〃	〃	にぶい橙 7.5YR7/4	左同	〃	〃
107	7-2115	1号墳石室埋土	中・後	深鉢	口	8 ~10	隆帯区画、沈線、口唇部に縄文	ナデ	〃	精・砂	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃	18
108	7-2110	Q116表土	晩?	〃	体	8 ~9	垂下平行短沈線	〃	〃	並・砂	良	明褐 7.5YR5/6	〃	〃	〃
109	7-2127	1号墳南表土	〃	深鉢?	〃	7 ~8	素文突帯、橋状把手	〃	不明	良・砂	不良	にぶい黄褐 10YR5/4	〃	〃	〃
110	7-2117	K105SK11	〃	深鉢	底	7	平底(若干上げ底気味)	〃	ナデ	並・砂	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃	〃
111	7-2111	Q116表土	〃	〃	〃	5	上げ底	〃	〃	〃	良	橙 7.5YR6/6	明褐 7.5YR5/8	〃	〃
112	7-2116	L108SK14	〃	深鉢	〃	8	平底	〃	〃	良・砂	〃	明褐 7.5YR5/8	左同	〃	〃
113	7-2077	表土	〃	〃	〃	8 ~15	若干上げ底	〃	〃	粗・砂	不良	橙 2.5YR6/6	〃	〃	〃
114	7-2081	3号墳周辺表土	〃	浅鉢?	〃	12 ~14	平底	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR4/1	〃	〃
115	7-2141	SX1西方トレンチ	晩・後	深鉢	〃	15	〃	〃	〃	良・砂	〃	にぶい黄橙 10YR6/4	黒褐 10YR3/1	〃	〃
116	7-2140	SX1西方落ち込み	〃	〃	〃	10 ~15	〃	〃	〃	並・砂	〃	明黄褐 10YR7/6	暗灰黄 2.5Y4/2	〃	〃
117	7-2109	3号墳北表土	〃	〃	〃	5 ~8	〃	〃	〃	〃	並	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄褐 10YR5/3	〃	〃
118	7-2113	1号墳東南トレンチ	弥・前	壺	口	7 ~10	口縁内面3本凹線、上下端部刻み	〃	〃	精・砂	不良	橙 7.5YR6/6	左同	〃	〃
119	7-2106	1号墳墳丘	〃	〃	体	6 ~7	体部に突帯、体上半にヘラ複合鋸歯文	〃	〃	並・砂	〃	橙 7.5YR6/8	〃	〃	〃
120	7-2114	7号墳石室掘形	〃	〃	頸	7	ヘラ多条沈線(4本)	〃	〃	〃	良	明黄褐 10YR6/6	灰黄褐 10YR4/2	〃	〃
121	7-2093	1号墳表土	〃	〃	〃	8	ヘラ多条沈線	〃	〃	〃	不良	にぶい橙 7.5YR6/4	左同	〃	〃
122	7-2099	〃	〃	〃	体	6	沈線(半截竹管)	〃	〃	並	並	明褐 7.5YR5/6	〃	〃	〃
123	7-2112	E地区西方表探	〃	甕	口	6 ~8	沈線、口縁端部刻み	〃	〃	並・砂	良	褐 7.5YR4/3	にぶい褐 7.5YR5/3	〃	〃
124	7-2096	1号墳東土坑2	〃	〃	頸	6	沈線(半截竹管)	〃	〃	粗・砂	〃	浅黄橙 7.5YR8/4	左同	〃	〃
125	7-2150	1号墳墳丘	弥・中	壺	口	5 ~8	口縁端部肥厚、面取り	〃	〃	良・砂	〃	にぶい黄褐 10YR5/3	〃	〃	〃

※時期欄の後・前は後期前葉、晩・後は晩期後葉、弥・前は弥生前期、弥・中は弥生中期を示す。

第6表 遺物観察表4

PL1



E地区全景（東から）



E地区調査後全景（南東から）



E地区調査後全景（北西から）



E地区・天保古墳群調査後全景



SX1 (西から)



SX1 遺物取上げ後 (西から)

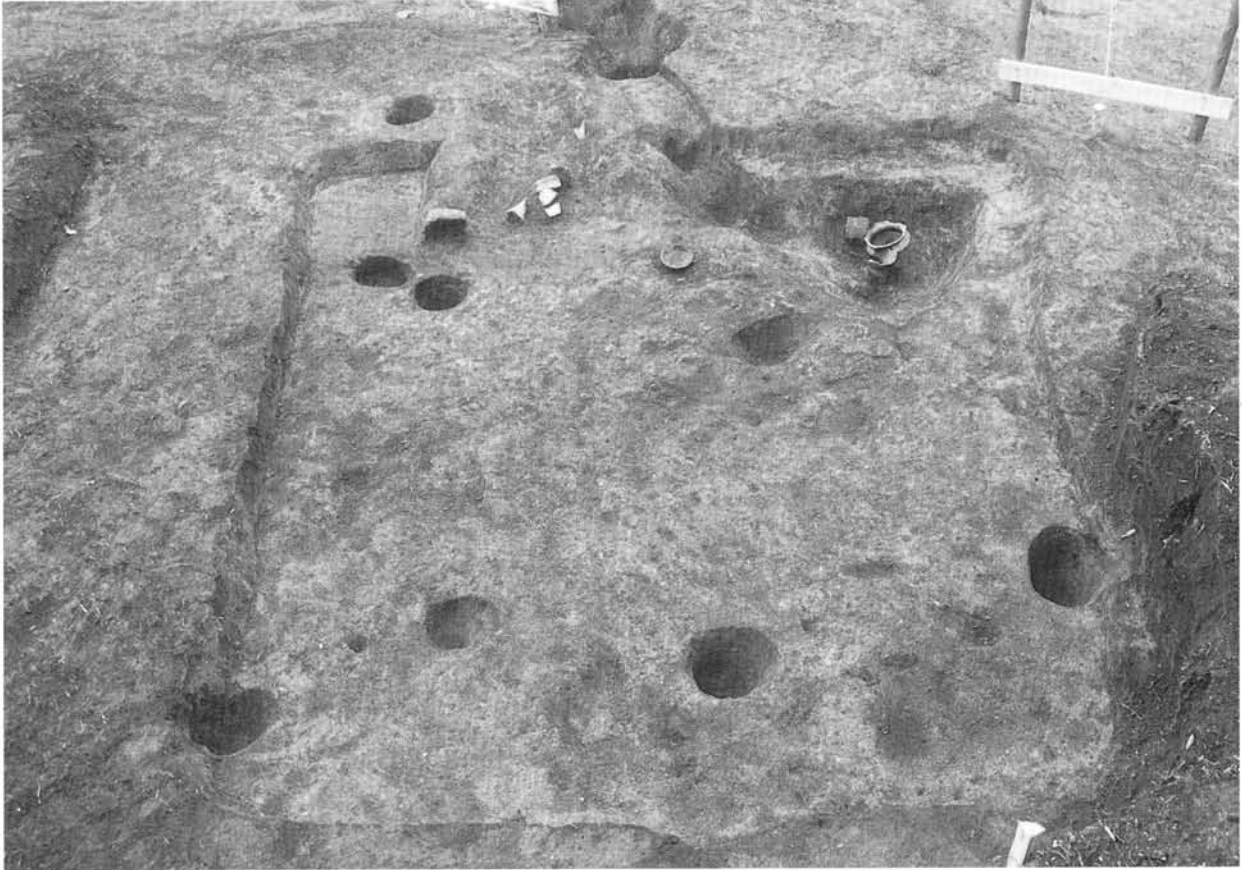
PL 5



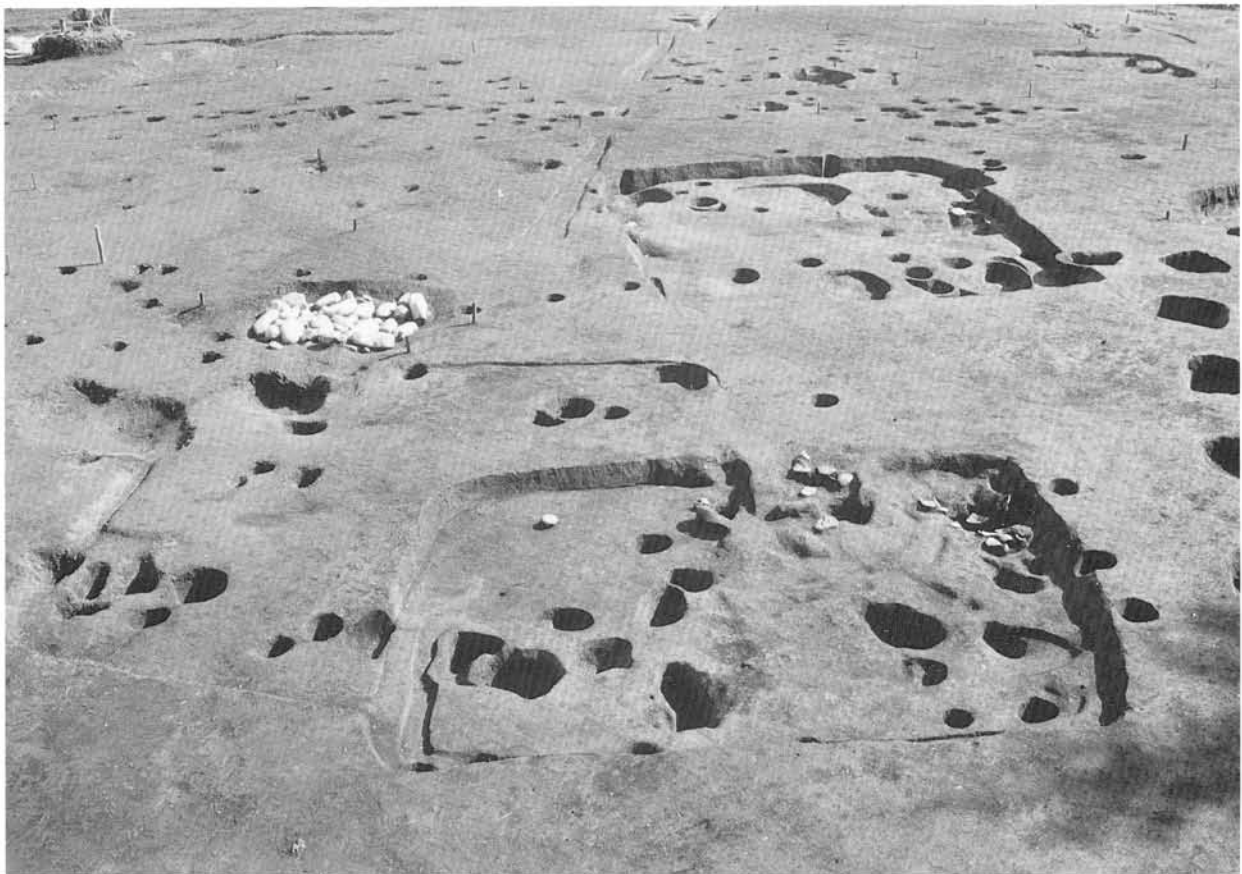
SB 3・4・5・9 (北から)



SB 5・6・7 (北から)



SB 2 (西から)



SB 3・4・5 (西から)

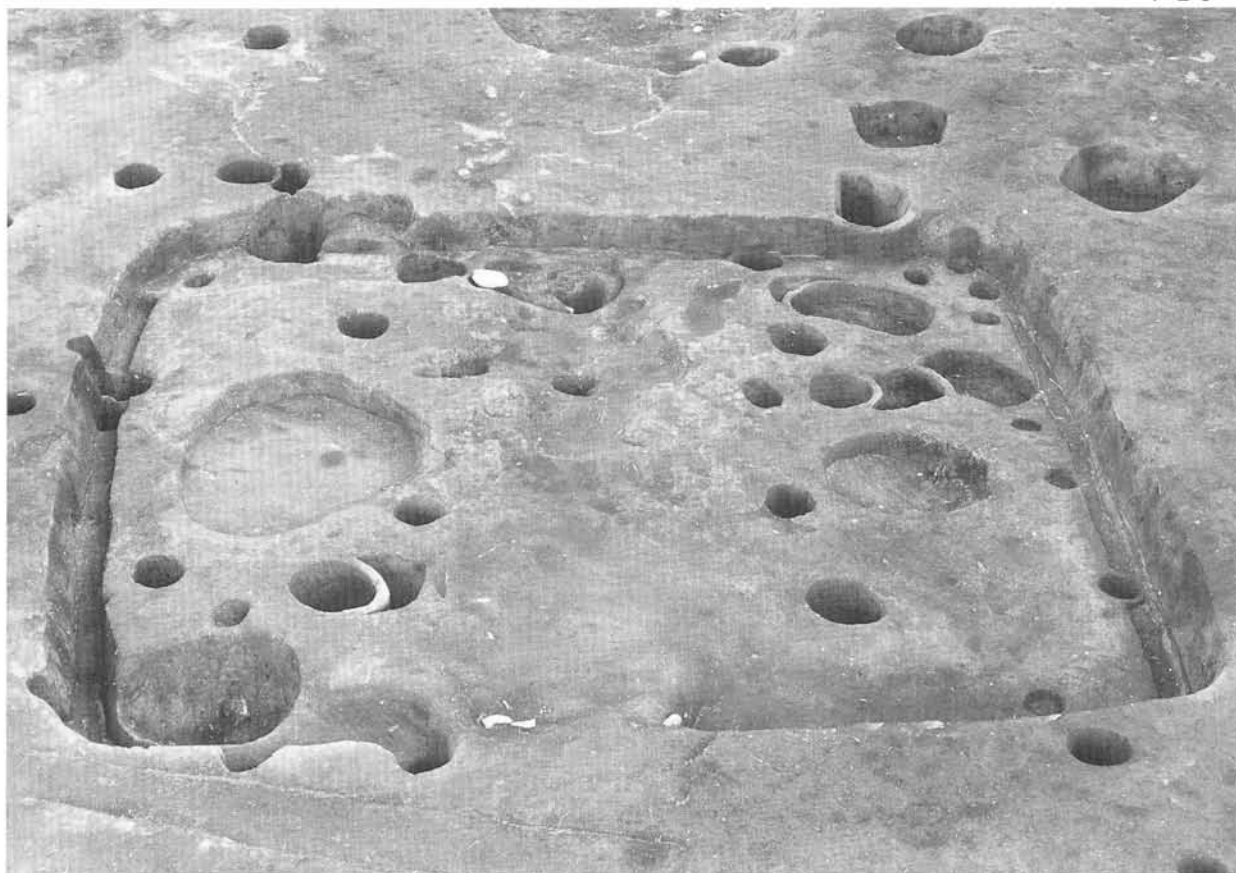
PL7



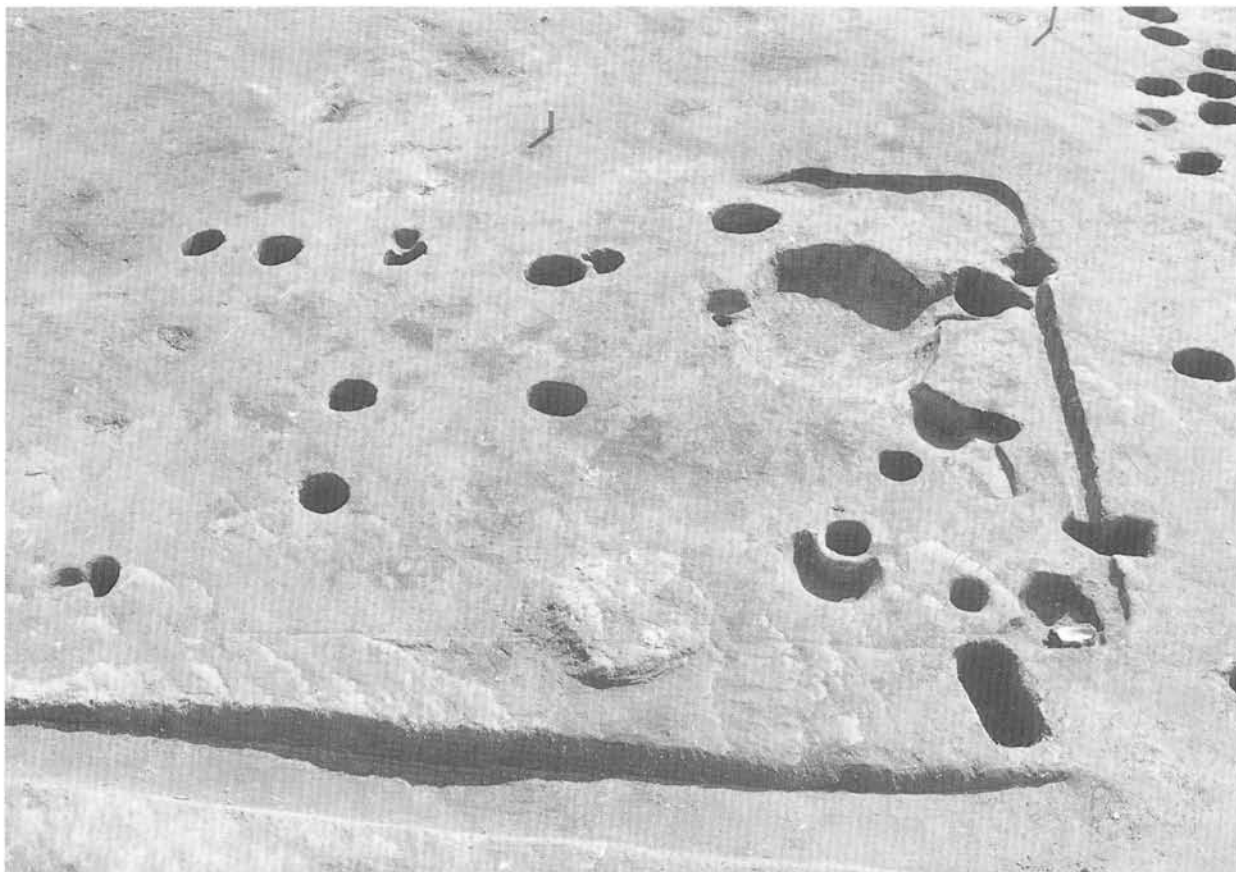
SB4貯蔵穴（西から）



作業風景

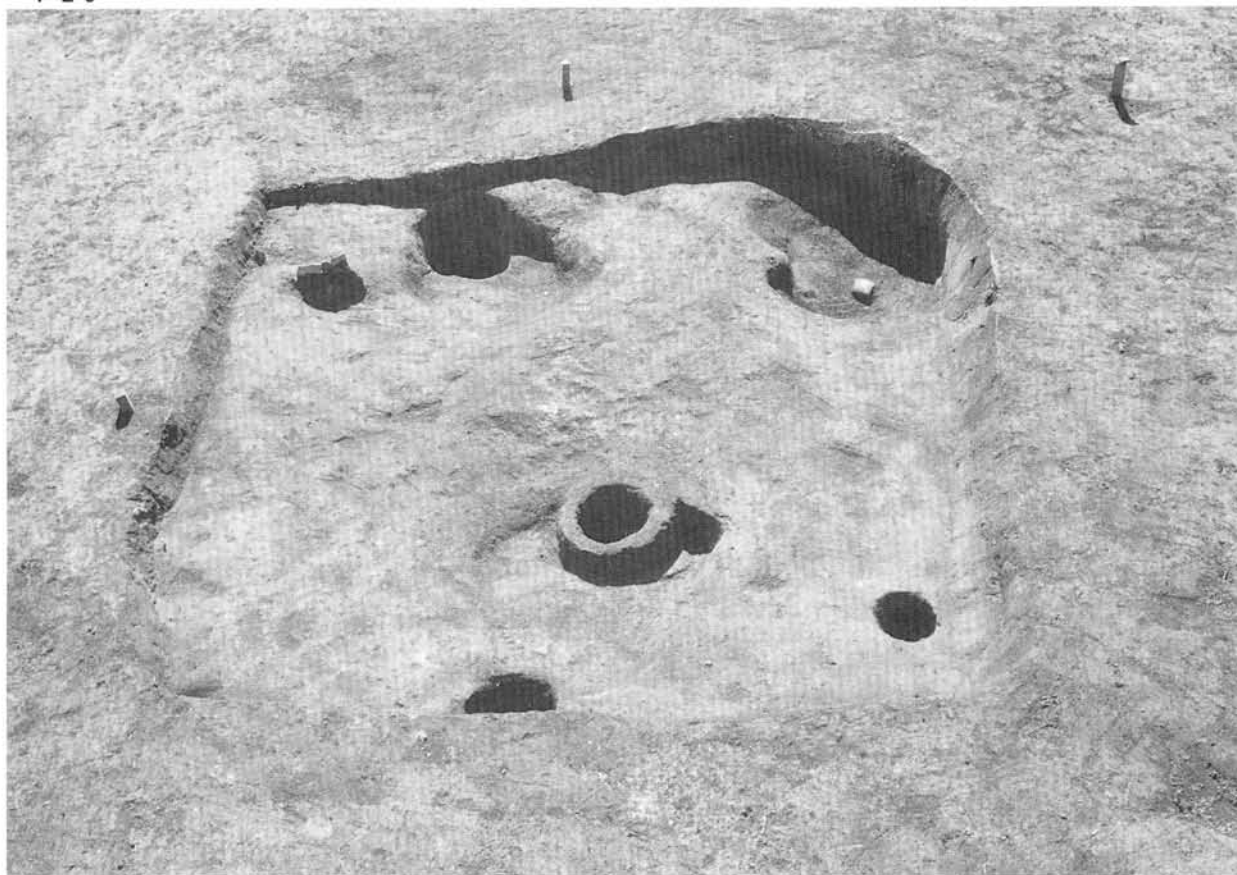


SB 5 (北から)

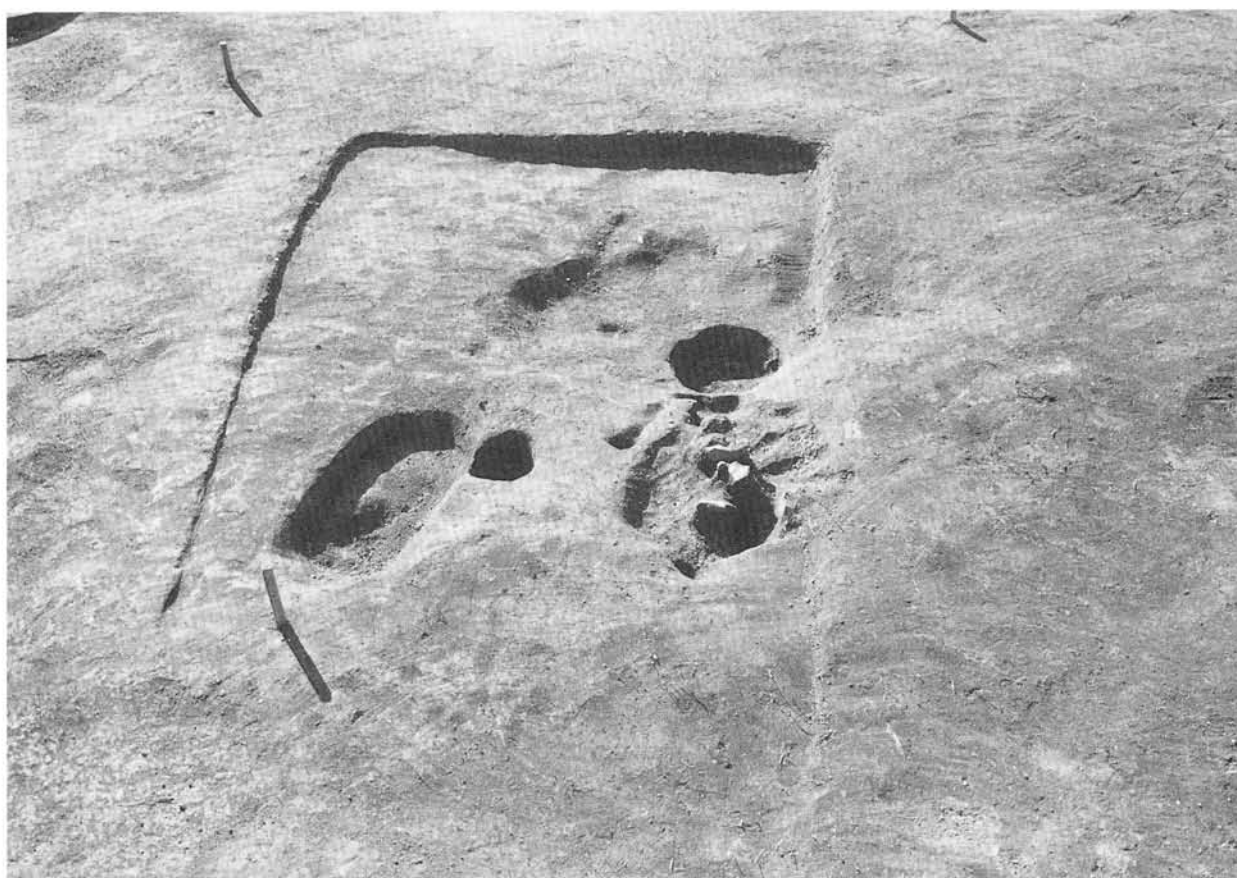


SB 6 (北から)

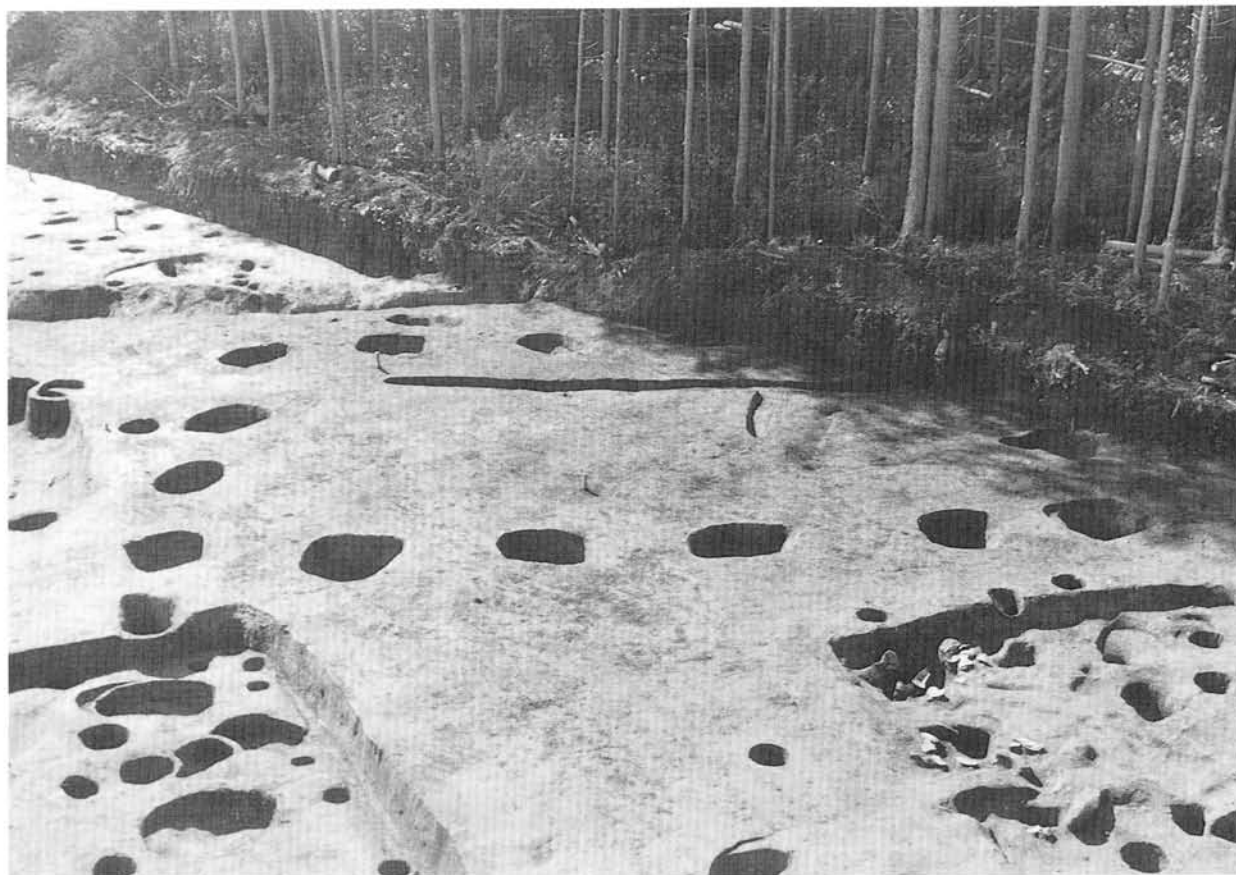
PL 9



SB 7 (北から)



SB 8 (東から)

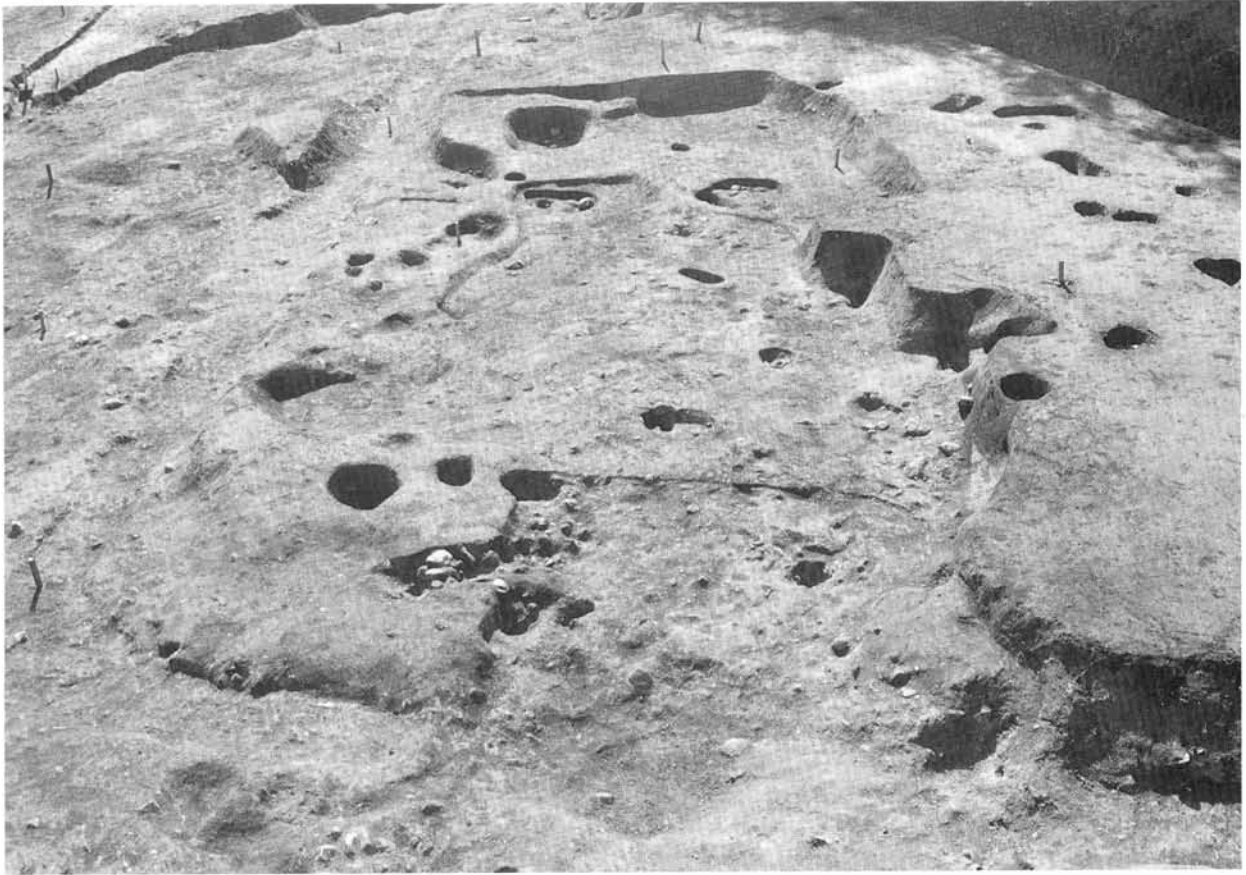


SB9 (北から)



SK10 (東から)

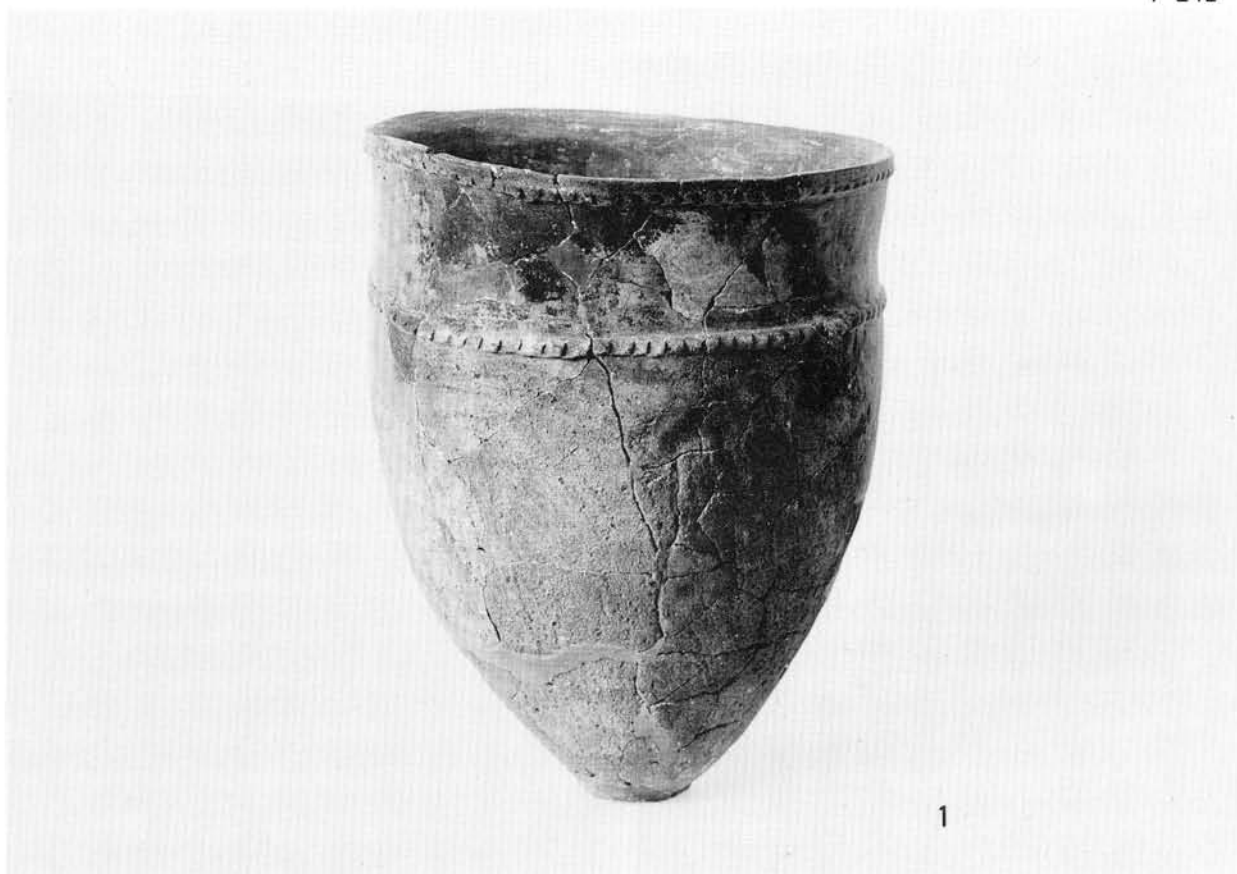
PL11



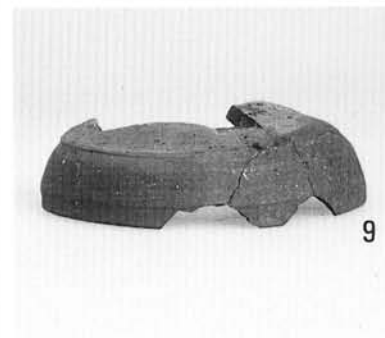
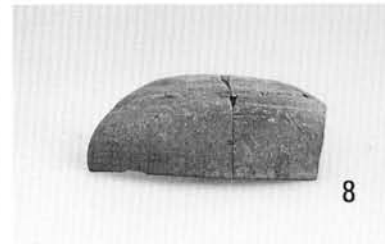
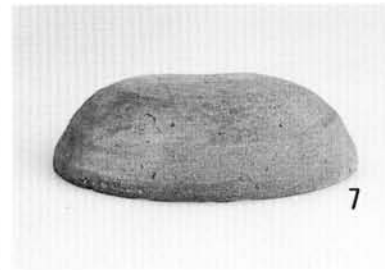
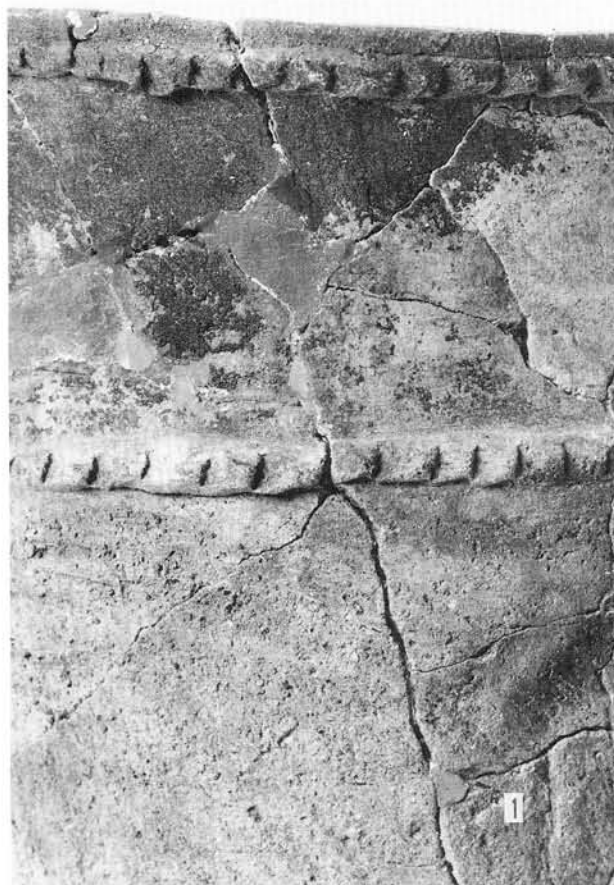
SB11・13、SK12 (北から)



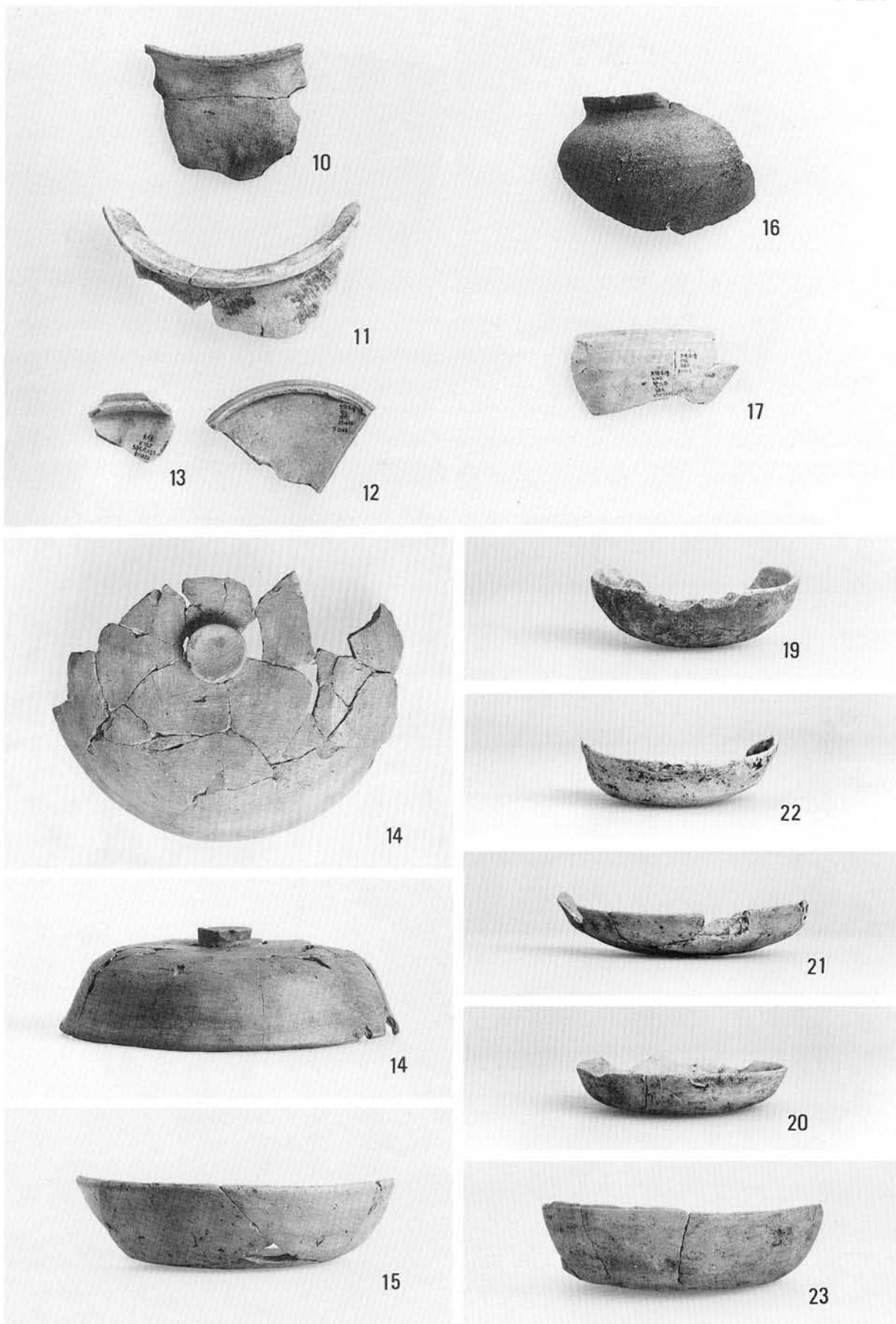
SB11 (東から)



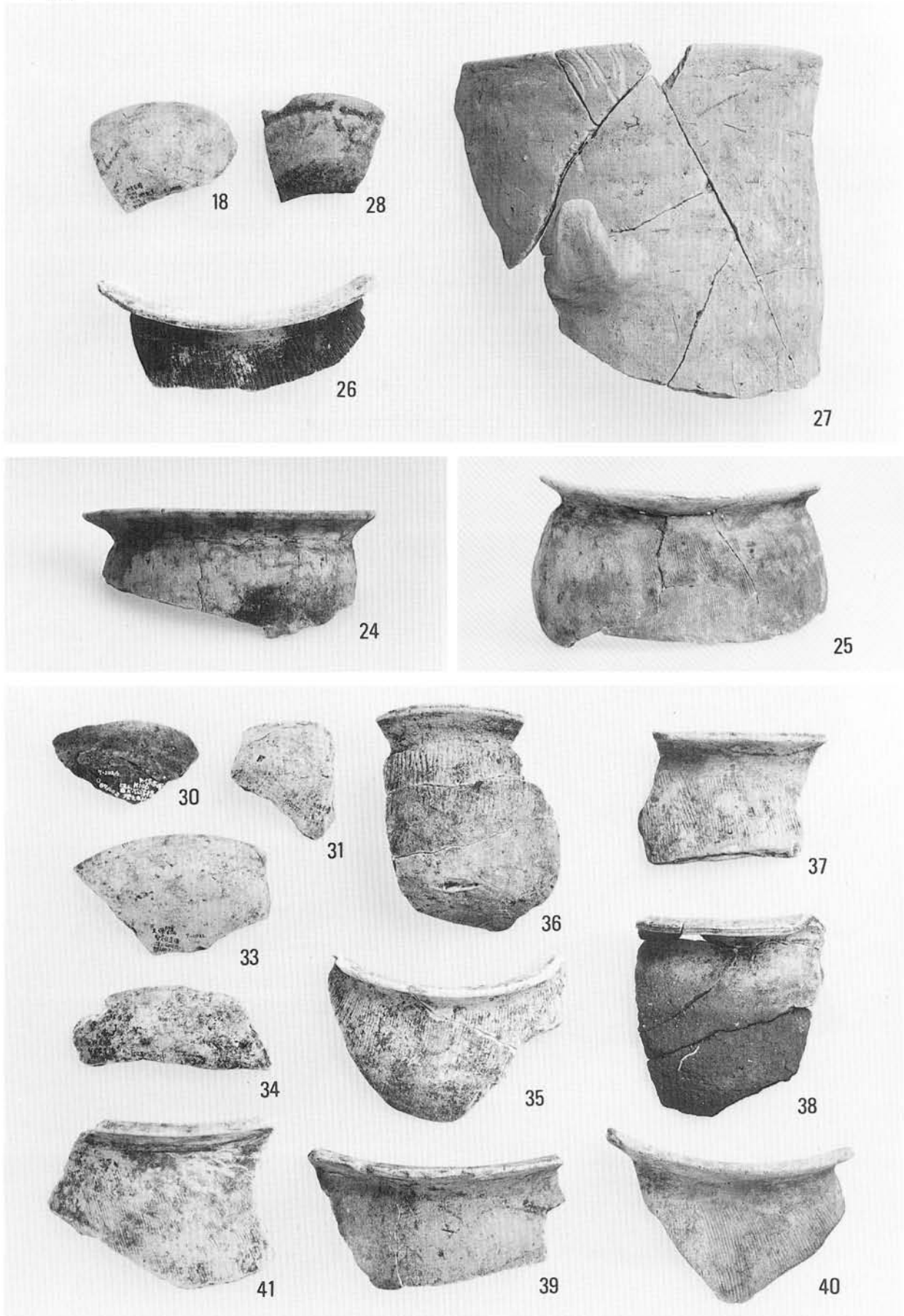
出土遺物(縮尺任意)



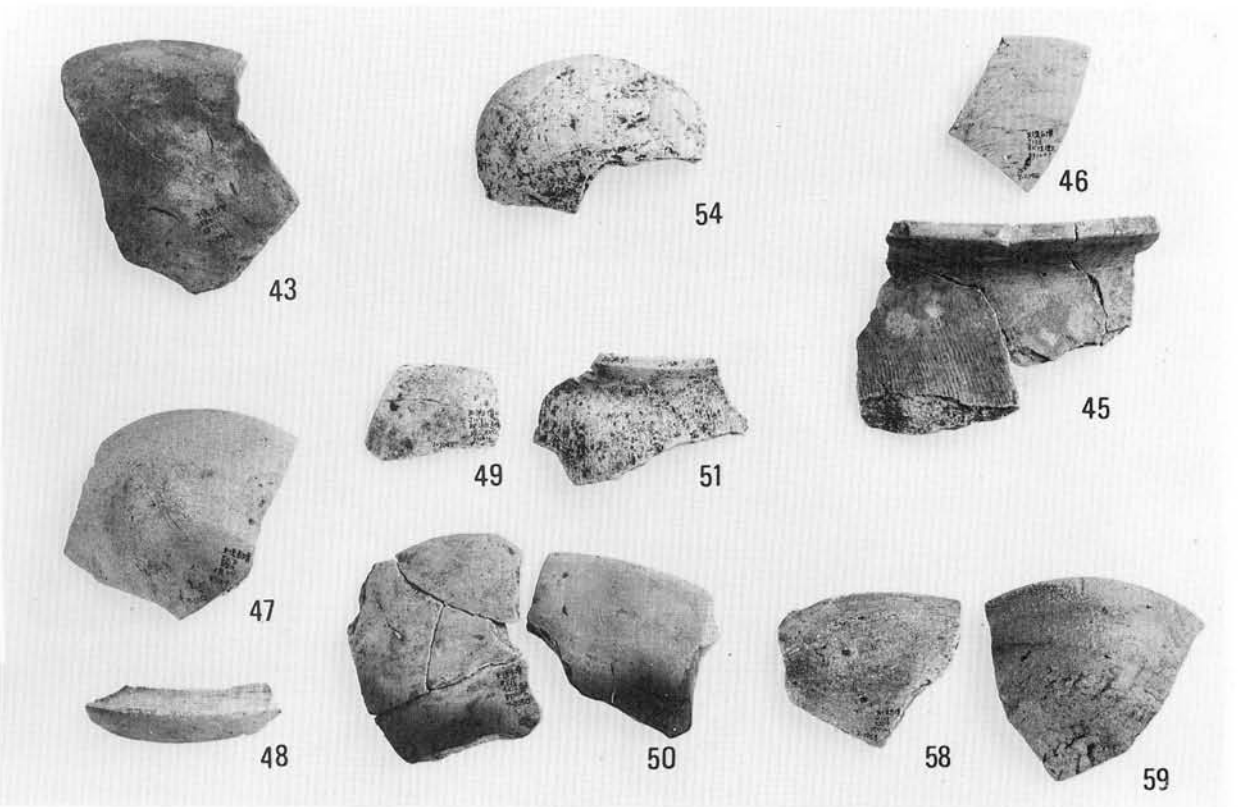
出土遺物（1：3）ただし上半は縮尺任意



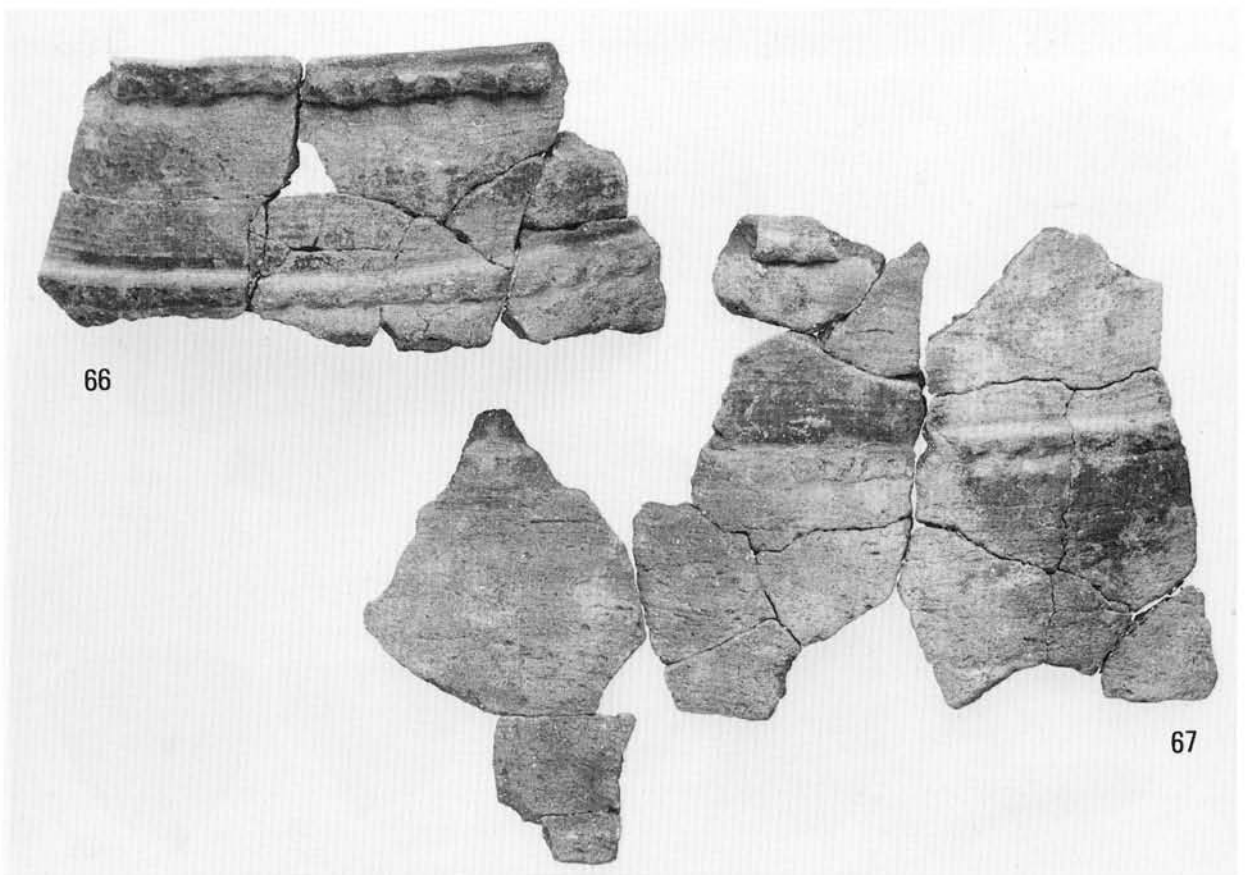
出土遺物 (1 : 3)



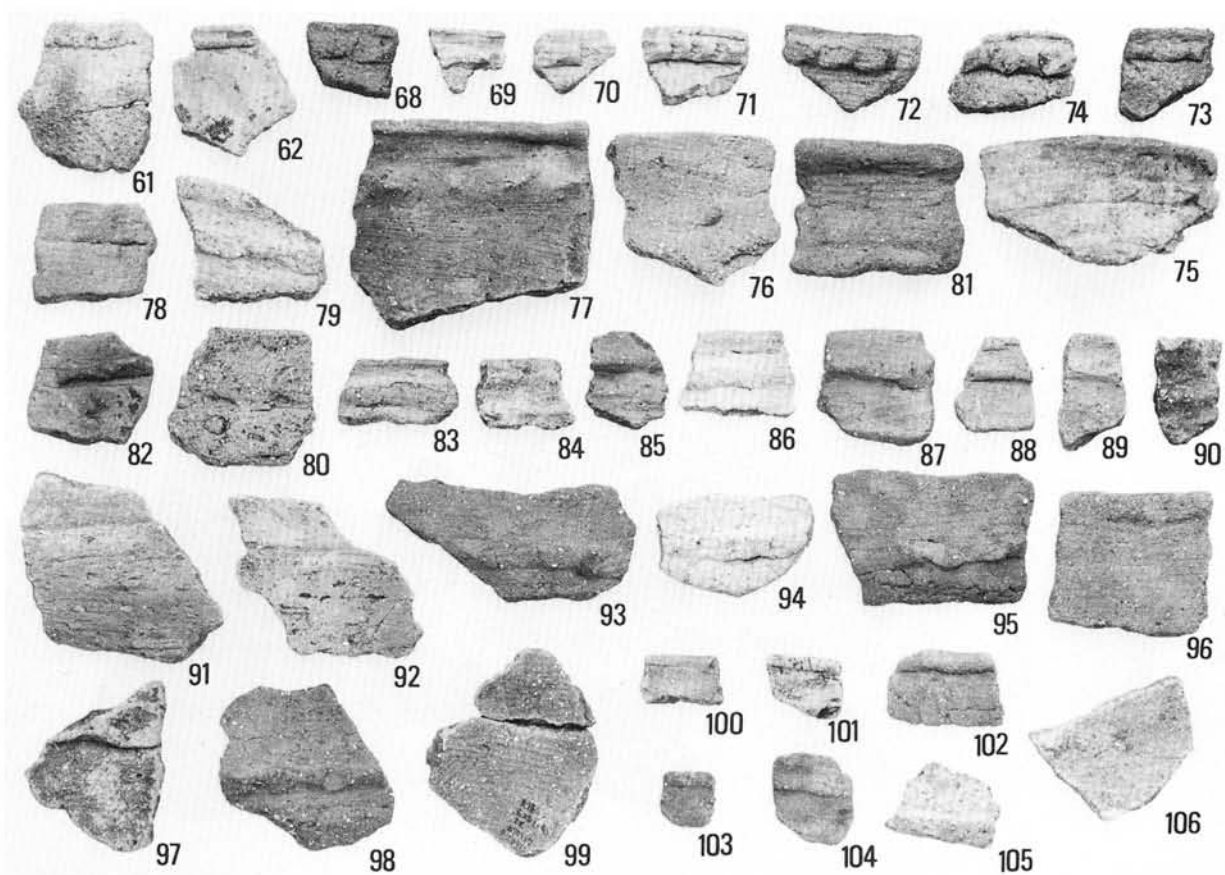
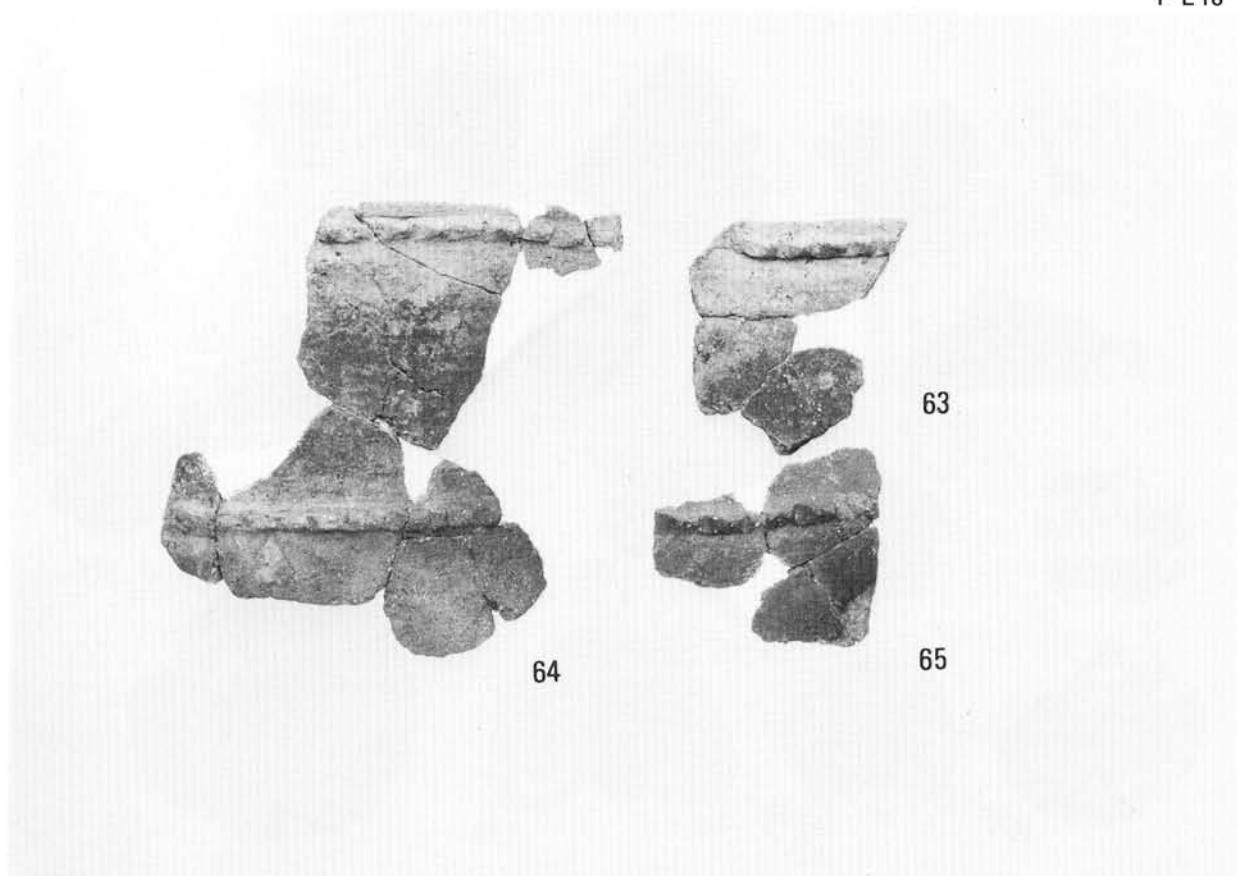
出土遺物 (1 : 3)



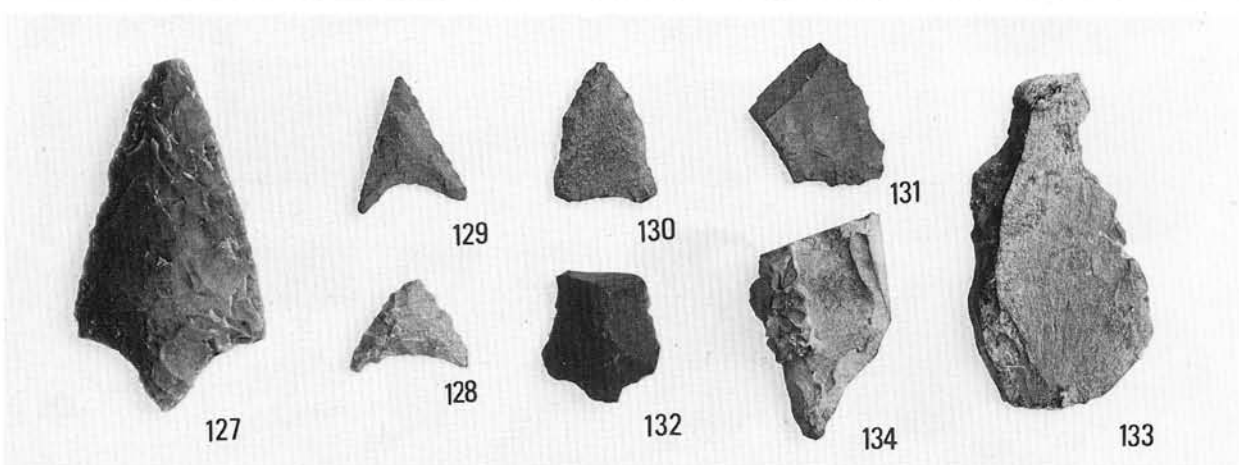
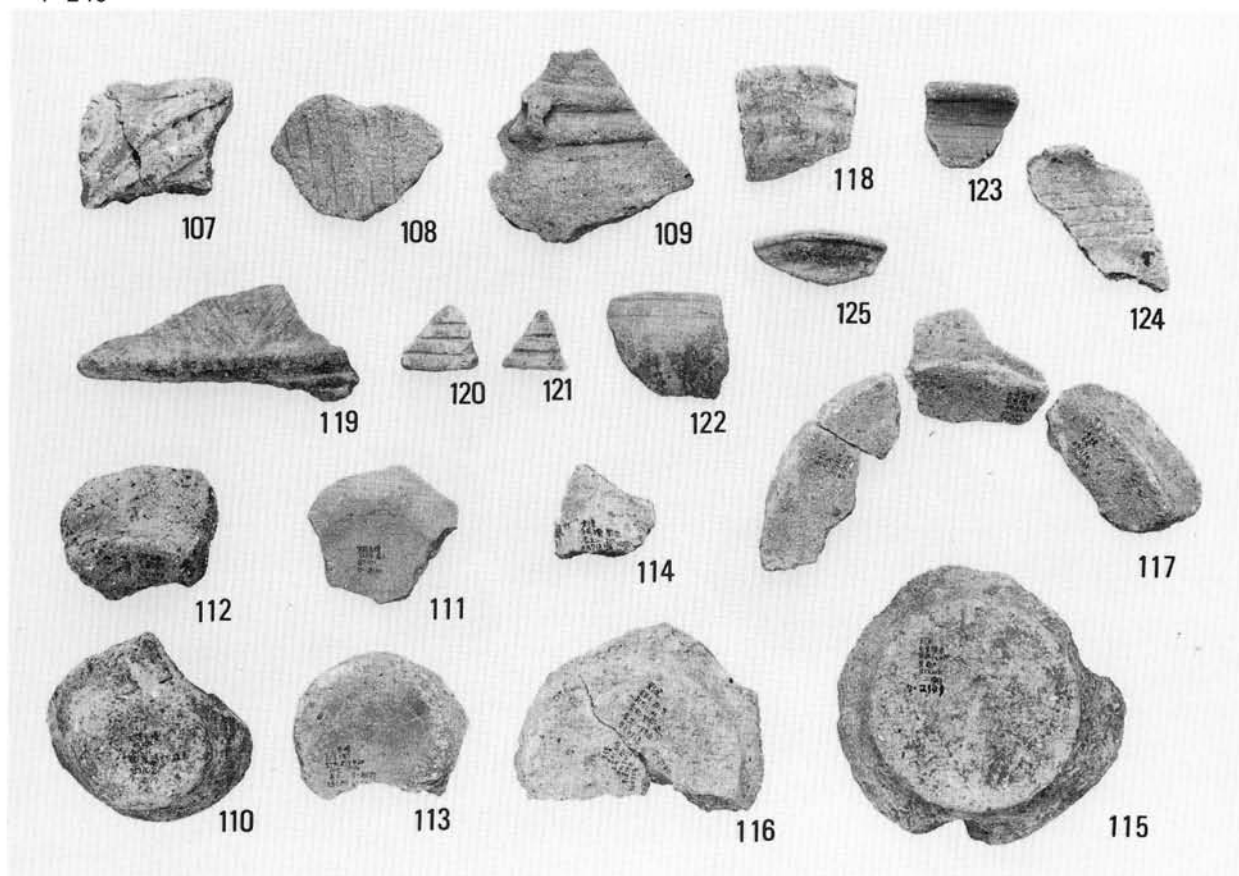
出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物（1：3）ただし下半は1：1

平成3(1991)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告87-13

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

— 第3分冊 7 —

1991(平成3)年3月31日

編集 三重県教育委員会
発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 オリエンタル印刷株式会社
